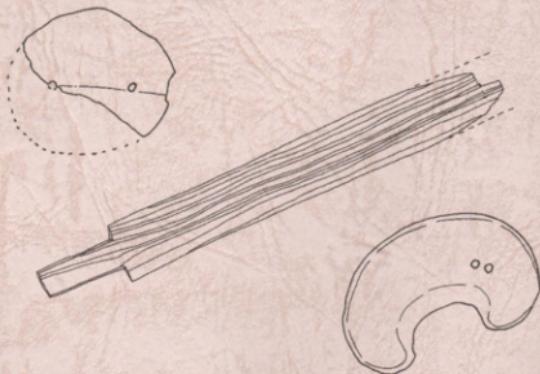


大阪瓦斯株式会社高所対策ガバナ設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

# 奈良井遺跡発掘調査概要報告書

— 四條畷市大字中野所在 —



平成24（2012）年2月

四條畷市教育委員会



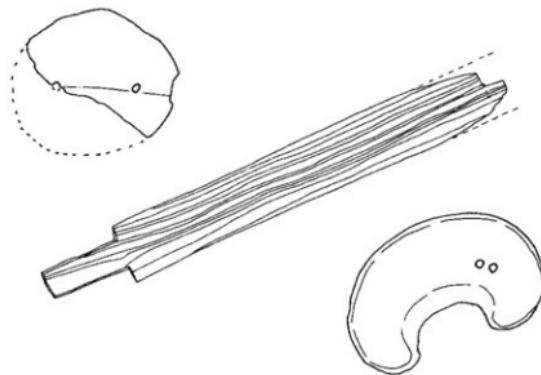
平成24（2012）年2月

四條畷市教育委員会

大阪瓦斯株式会社高所対策ガバナ設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

## 奈良井遺跡発掘調査概要報告書

— 四條畷市大字中野所在 —



平成24（2012）年2月

四條畷市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、平成23（2011）年3月から4月にかけて実施した奈良井遺跡（N R10-1）での大阪瓦斯株式会社高所対策ガバナ設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、大阪瓦斯株式会社からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課 主幹 野島 稔の指導のもと、主査 村上 始・事務職員 實盛良彦を担当者として実施した。
4. 発掘調査の実施にあたっては、大阪瓦斯株式会社から多大なる御配慮・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫、瀬川芳則（元関西外国语大学教授）、宮崎泰史（大阪府教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、佐野喜美（四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（敬称略、順不同）

6. 出土遺物の整理・図面作成などは、村上・實盛が、酒井圭二、下澤あい、田伏美智代、松田真一、安田しのぶの協力を得て行った。
7. 本書は、野島・村上・實盛が分担して執筆・編集を行った。文責者については、それぞれの文末に記載している。
8. 発掘調査で出土した遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 須恵器の編年については、田辺昭三のもの（田辺1981）と中村浩のもの（中村2001）を併記することとした。

## 本文目次

卷頭写真図版	
例 言・凡 例	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	5
第1節 遺跡の位置と既往の調査	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 調査の経過 .....	9
第1節 調査の経過	
第3章 調査の成果 .....	11
第1節 基本層序	
第2節 遺構	
第3節 出土遺物	
第4章 まとめ .....	34
第1節 調査のまとめ	
第2節 王権を支えた馬	
参考文献 .....	39
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 .....	6
第2図 調査地区位置図 .....	9
第3図 調査地区配置図 .....	10
第4図 調査地区平面図 .....	12
第5図 調査地区断面図 .....	13
第6図 遺物出土状況図 .....	15~16
第7図 出土遺物（1） .....	19
第8図 出土遺物（2） .....	21
第9図 出土遺物（3） .....	23
第10図 出土遺物（4） .....	24
第11図 出土遺物（5） .....	25
第12図 出土遺物（6） .....	26

第13図 出土遺物（7）	28
第14図 出土遺物（8）	30
第15図 出土遺物（9）	32
第16図 奈良井遺跡古墳時代祭祀遺構配置図	35
第17図 馬形埴輪	37
第18図 いけにえにされた馬の頭骨	37

## 写 真 図 版 目 次

### 卷頭写真図版1

- 写真図版 1 1. 調査前現況  
2. 調査状況
- 写真図版 2 1. 溝1-A・1-B遺物出土状況（1～3地区）西側から
- 写真図版 3 1. 溝1-A 遺物出土状況（上層）北側から  
2. 溝1-A 遺物出土状況（上層）東側から
- 写真図版 4 1. 溝1-A 遺物出土状況（下層）南側から  
2. 溝1-A 刀形木製品出土状況（下層）南側から
- 写真図版 5 1. 溝1-A 木製鏃出土状況（上層）東側から  
2. 溝1-A 滑石製勾玉出土状況（下層）南側から
- 写真図版 6 1. 溝1-A・1-B全景（1～3地区）北東側から  
2. 1・3地区全景（溝1-B・土坑・柱穴）西側から
- 写真図版 7 1. 溝1-A・1-B全景（2・4地区）東側から  
2. 北壁断面 南側から  
3. 溝1-A・1-B・溝2断面（E-E'）西側から
- 写真図版 8 1. 出土遺物（須恵器）  
2. 出土遺物（須恵器）
- 写真図版 9 1. 出土遺物（須恵器）  
2. 出土遺物（土師器）
- 写真図版10 1. 出土遺物（土師器）  
2. 出土遺物（韓式系土器・製塙土器・土製品）
- 写真図版11 1. 木製品（鏃・刀形）  
2. ガラス玉・滑石製品・土玉
- 写真図版12 1. 砥石・石製品・馬齒

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

## 第1節 遺跡の位置と既往の調査

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の四條畷地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。

奈良井遺跡は、四條畷市中野三丁目を中心として広がる遺跡で、主に古墳時代中期から後期にかけての馬関係の祭祀跡を中心とした遺跡である。最初にこの遺跡を確認したのは1976年で、現在のJR学研都市線の複線化工事に伴って発掘調査を行った（四條畷市教育委員会編1976、藤原1977）。

1979年には四條畷市立市民総合センター建設に伴って発掘調査を行い（野島1980b、櫻井・佐野・野島2006、2010等）、古墳時代中期の長さ約16m、最大幅約2.5m、深さ約1mの溝を検出した。この溝からは滑石製の白玉36点が、須恵器大甕の内部より一括で出土した。この溝を中央としてそれを取り囲むように、一辺約40m、最大幅約5m、深さ約1~1.5mの古墳時代後期初頭の方形周溝状遺構を検出した。遺構からは、土師器壺・須恵器高杯・甕・蓋・滑石製有孔円盤・木製品・ミニチュア土器などのほか、7頭分の馬骨・馬齒が出土した。なかでも1頭は、ほぼ完全な形で検出された。一方で、馬の首のみが切られて土坑に埋められたものもあった。方形周溝状遺構と、中央の溝との合流地点からは馬形・人形の土製品18点が出土した。これらのことから、この方形周溝状遺構は、馬の祭祀を行う祭祀場であったと考えられている。この方形周溝状遺構の西約60mの場所では、同じく古墳時代後期初頭の一辺約1.2m、深さ約1mの方形板枠井戸を検出した。

2000年には個人住宅の建設に伴い、今回の調査地区的北隣を調査し、1979年検出の方形周溝状遺構の続きと考えられる溝を検出し、須恵器蓋壺が集中的に出土したほか、馬齒・製塙土器・韓式土器や韓式系土器・ミニチュア土器などが出土した（野島・村上2000）。ただし、このとき検出した溝はその幅の半分程度であった。

## 第2節 周辺の歴史的環境

奈良井遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物が見つかっている（第1図）。  
旧石器時代

周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川床遺跡があげられ、ハンドアッカス・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山1967a）。

### 縄文時代

縄文時代草創期の有茎尖頭器が、南山下遺跡（野島1978）、木間池北方遺跡（村上1997）などで見つかっている。

縄文時代後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡があげられる。ここでは北陸地方から搬入された大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧をはじめ、土偶・土製勾玉などの祭祀具・高环形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した（片山1967b、櫻井1972、野島2000）。

### 弥生時代

弥生時代前期初頭の土器が、2005年の大阪府文化財センターによる調査で縄文時代晩期の突帯文土器とともに讚良郡条里遺跡で見つかっている（中尾・山根編2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稻作の初現を示している。

雁屋遺跡は弥生時代の前期から後期にわたって続く集落である。1983年の調査では弥生時代前期の大形壺が出土した（野島1984）。この大形壺は北部九州の板付II式のものである。その壺に伴い石庵丁が2点出土した。そのうちの1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。

雁屋遺跡は中期になると拠点的集落として機能した。1985~1986年の調査で4基の方形周溝墓を検出し、1号方形周溝墓と2号方形周溝墓内から子供用のものを含めて合計20基の組合せ式木棺を検出した（野島1987a）。棺材の樹種鑑定によりコウヤマキ・ヒノキ・カヤ材が使用されていたことが判



第1図 周辺遺跡分布図

- |             |            |             |               |
|-------------|------------|-------------|---------------|
| 1. 奈良井遺跡    | 2. 讀良川床遺跡  | 3. 讀良寺跡     | 4. 更良岡山古墳群    |
| 5. 讀良寺墓地    | 6. 更良岡山遺跡  | 7. 忍岡古墳     | 8. 北口遺跡       |
| 9. 奈良田遺跡    | 10. 坪井遺跡   | 11. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 12. 岡山南遺跡     |
| 13. 南山下遺跡   | 14. 中野遺跡   | 15. 墓ノ堂古墳   | 16. 中野共同墓地    |
| 17. 清瀧古墳群   | 18. 正法寺跡   | 19. 国中神社内遺跡 | 20. 四條畷小学校内遺跡 |
| 21. 木間池北方遺跡 | 22. 大上遺跡   | 23. 城遺跡     | 24. 雁屋遺跡      |
| 25. 南野米崎遺跡  | 26. 伝和田賛秀墓 | 27. 南野遺跡    | 28. 近世墓地      |

明した。特にコウヤマキ製の木棺は遺存状態が良好なものが多くみられた。また1号方形周溝墓2号主体部では、コウヤマキの底板上で被葬者の腹部から腰部にあたるところからサスカイト製の打製石鏃が12点出土した。1号方形周溝墓と2号方形周溝墓の共有する周溝内から出土した壺3点・把手付鉢・水差形土器の5点には水銀朱が塗られていた。塗布された部分が土器の一部の面であることから、土器の正面を意識したものとも考えられる。また同じ周溝からは蓋付木製四脚容器が出土した。容器は、ヤマグワ材を4本の脚が付く隅丸方形に削りぬいて製作しており、口縁部の左右にはそれぞれ2個の孔を開けた突出した耳が付いている。蓋の上面には双頭鷲文が浮き彫りされている。左右にはそれぞれ2個の孔を開けた突出した耳が付いていて、容器と蓋を紐で固定できる状態である。またこの蓋にも水銀朱が塗られていた。

1993~1994年の調査では方形周溝墓の溝からノグルミ製の鳥形木製品が出土した（野島1994）。またその鳥形木製品のそばから、長さ約1.4mで断面U字状の隅丸長方形をしたモミ材の板状木製品が出土した。火災を受けた中期の堅穴住居からは分銅形土器品や炉跡からト骨と考える肩甲骨が出土している。また土坑からは木製盤・杓子など未成品のものが多く出土しており、未成品の貯蔵施設と考えられる。石製品としては特筆すべきものとして、銅鐸の舌が2本出土している。そのうちの1本は徳島県吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩製である。

銅鐸については、明治44年に、四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられる砂山銅鐸2口があり（梅原1985）、現在関西大学の所蔵となっている。

2010年の調査では、掘立柱建物を構成すると考えられる柱が2基出土したほか、木製品の貯蔵施設と、それを囲むように不整形に区画する杭列を検出した（村上・實賀2011）。遺物としては播磨地域の特徴を示す土器が出土しており、中期から他地域との交流があったことを示している。

大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査では（辻本1987、阿部1999等）、中期の方形周溝墓や後期の堅穴住居などが多数検出されている。特筆すべき遺物としては、中期の鳥形木製品や後期のシャーマンを線刻した土器などがあげられる。

後期の雁屋遺跡は日本海側と活発な交流を持つ集落となった。1985~1986年の調査では後期の旧河川・周溝墓・堅穴住居・土壙を検出した（野島1987a）。弥生時代後期の周溝墓は大きく削平を受けており、主体部は痕跡を残すのみであったが、周溝内からは在地の土器とともに丹後系の台付鉢や甕、近江系の鉢、出雲・山陰系の低脚杯や土玉が出土したほか、堅穴住居からは丹後系の把手付鉢が出土した（三好ほか2007）。これらのことから、弥生時代後期の雁屋遺跡は日本海側地域との交流があったものと考えられる。鉄片と鉄滓も出土しており、鉄の豊富な日本海側地域と交流を持つことで鉄を手に入れていたと考えられる。以上のように、雁屋遺跡は中期から後期まで拠点的集落として存在した遺跡である。

#### 古墳時代

四條畷でもっとも古い古墳は、古墳時代前期中葉に築造された全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳である。昭和9年の室戸台風で式内社忍陵神社が倒壊し、その建て直しの際に堅穴式石室が発見され、京都大学によって調査された（梅原1937）。すでに盗掘されていたが、碧玉製の車輪石・鉄形石・紡錘車・鉄劍・鉄鎌・小札片などが出土した。また四條畷市教育委員会で1973年に堅穴式石室の実測図を作成した（宇治田・桑原1974）。

中期になると、墓ノ堂古墳を筆頭に、馬銅集団が墓域としたと考えられる清滄古墳群や大上古墳群をはじめ、更良岡山古墳群など次々と古墳が築造された。墓ノ堂古墳は、全長約62mの前方後円墳である（櫻井・佐野・野島2006、2010）。清滄古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。

形象埴輪は、古墳から出土するのが通常であるが、四條畷では集落遺跡からの出土が多く、中期に属するものが出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島2006、2010等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している（野島1982）。なお、家形埴輪に伴って左足用の木製下駄が出土している（野島1979、1982）。古墳から出土した形象埴輪は、忍ヶ丘駅前1号墳での琴を弾く男性埴輪などがある（野島1993、1997）。

後期の古墳として、大上3号墳は全長約45mの帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、円筒埴輪が立て並べられた状態で多数出土した（村上2006）。時期は古墳時代後期後半である。大上1号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が1点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。その他の古墳でも、裝飾壺や鳥形匣、

玉類など多数の副葬品が出土している。埴輪は、出土するもののほとんどが円筒埴輪である。

古墳時代における四條塙の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。馬は朝鮮半島から運ばれ、瀬戸内海、河内湖を経てこの地におさされたものと考えられる。古墳時代の四條塙は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。飯盛山系から、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が馬の食料を育て自然の柵ともなり牧場に適した環境であった。四條塙小学校内遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し（村上2000等）、牧場を運営した渡来系の人々の存在を示している。

#### 古代以降

正法寺跡は、大阪府教育委員会と四條塙市教育委員会がともに数次にわたって調査しており、南から南大門・中門・東西の塔・金堂・講堂・食堂と並ぶ薬師寺式の伽藍配置の寺院であると推定されている（大阪府教育委員会編1970）。これまでの調査で、中門、東塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である。一方白鳳期の創建当時の建物は、講堂の位置には掘立柱建物があったことがわかった（村上2001）。これ以外にも創建当時の掘立柱建物が多く検出されており、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であったと思われる。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田1977）、東塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編1970）。2001年の調査では、回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから鰐尾片が出土した（野島・村上2002）。この鰐尾片は白鳳期のもので、創建当時のものと考えられる。

讃良寺跡は1969年に部分的に調査されており、正法寺と同じく白鳳期の創建であることが分かっている（櫻井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010）。また、1997年の讃良川改修工事に伴う調査では正法寺のものと同様の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土した（野島編2000）。讃良寺出土のものの文様は型に起因する摩耗がみられ、正法寺出土のものが先に作られたものと考えられる（櫻井・佐野・野島2006、2010）。

奈良時代には正法寺跡周辺を中心に集落遺跡があいついで発見されている。河川跡では数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれていて、木間池北方遺跡では円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した（村上2006）。木間池北方遺跡で「□万呂」（村上2006）、南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土し（野島1995）、文字資料がみられるようになる。

城遺跡では旧通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が見つかった（野島1996c）。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断された。その後、放射性炭素年代測定法による分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。

平安時代には庶民生活が活発になったのか井戸が多く発見される。中野遺跡では「應保二年如月廿日」と書かれた墨書き曲物が出土し（櫻井・佐野・野島2006）、岡山南遺跡では「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が井戸から出土している（野島1987b）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條塙市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代では、坪井遺跡で鍛冶工房の跡が見つかっている（野島1996a、b）。工房跡では、鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が備わっていた。鎌5丁が残された工房もあった。

南北朝時代に四條塙では、四條塙の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

中野共同墓地には天文24（1555）年銘のある十三仏塔があり（山口1990）、四條塙で最も古い十三仏塔である。

（實盛良彦）

## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査の経過

奈良井遺跡は、四條畷市中野三丁目を中心として、直径約300mの範囲に広がる遺跡で、主に古墳時代中期から後期にかけての馬関係の祭祀跡を中心とした遺跡である。

1979年には今回の調査地区の西向かいで四條畷市立市民総合センター建設に伴って発掘調査を行った（野島1980b、櫻井・佐野・野島2006、2010等）、一辺約40m、最大幅約5m、深さ約1~1.5mの、古墳時代後期の方形周溝状遺構を検出した。遺構からは、土師器壺・須恵器高杯・壺・蓋壺・滑石製有孔円盤・木製品・ミニチュア土器などのほか、7頭分の馬骨・馬歯が出土した。この方形周溝状遺構は、馬の祭祀を行うステージのようなものであったと考えられる。

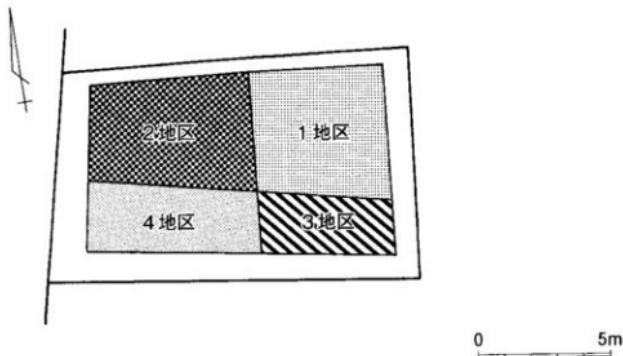
2000年には個人住宅の建設に伴い、今回の調査地区的北隣を調査し、1979年検出の方形周溝状遺構の続きと考えられる溝を検出し、須恵器蓋壺が集中的に出土したほか、馬歯・製塙土器・韓式土器や韓式系土器・ミニチュア土器などが出土した（野島・村上2000）。ただし、このとき検出した溝はその幅の半分程度であった。

四條畷市大字中野で、ガス関連施設の建設と、それに伴うガス管工事が行われることになり、そこが周知遺跡である奈良井遺跡の範囲内であったため、平成22（2010）年10月14日付文第1089号で、大阪瓦斯株式会社から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは平成22年11月1日付教委文第1-3363号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、工事立会が必要との判断があった。平成23（2011）年2月17日に埋設管の試掘調査に立会の結果、ガス関連施設の建設地については発掘調査が必要となり、平成23年3月3日から4月4日まで調査を行った。また、府道のガス管工事箇所のうち、今回の調査で検出した溝に統くと考えられた部分については、溝の埋土部分まで工事で掘削されることが予想されたため、平成23年4月7・8・15日に立会調査を行った。

今回の発掘調査地区は、市立市民総合センターの、府道を挟んだ東向かいの位置である（第2図）。また、調査地区は2000年の調査地の南に隣接する位置であった。調査地区的規模は、ガス施設の建設によって遺跡が破壊される東西約11m、南北約7m、面積約70.4m<sup>2</sup>であった。



第2図 調査地区位置図



第3図 調査地区配置図

調査地区はおおよそ東西南北に十字に区分し、北東の区画を1地区、北西の区画を2地区、南東の区画を3地区、南西の区画を4地区とした(第3図)。調査は、1~3地区を調査した後4地区を調査する反転の方法で行った。

調査は、埋設管試掘調査立会の結果から、まずおよそT.P.+23.500mまでバックホーで掘削を行い、それ以下は人力での掘削を行った。

(實盛)

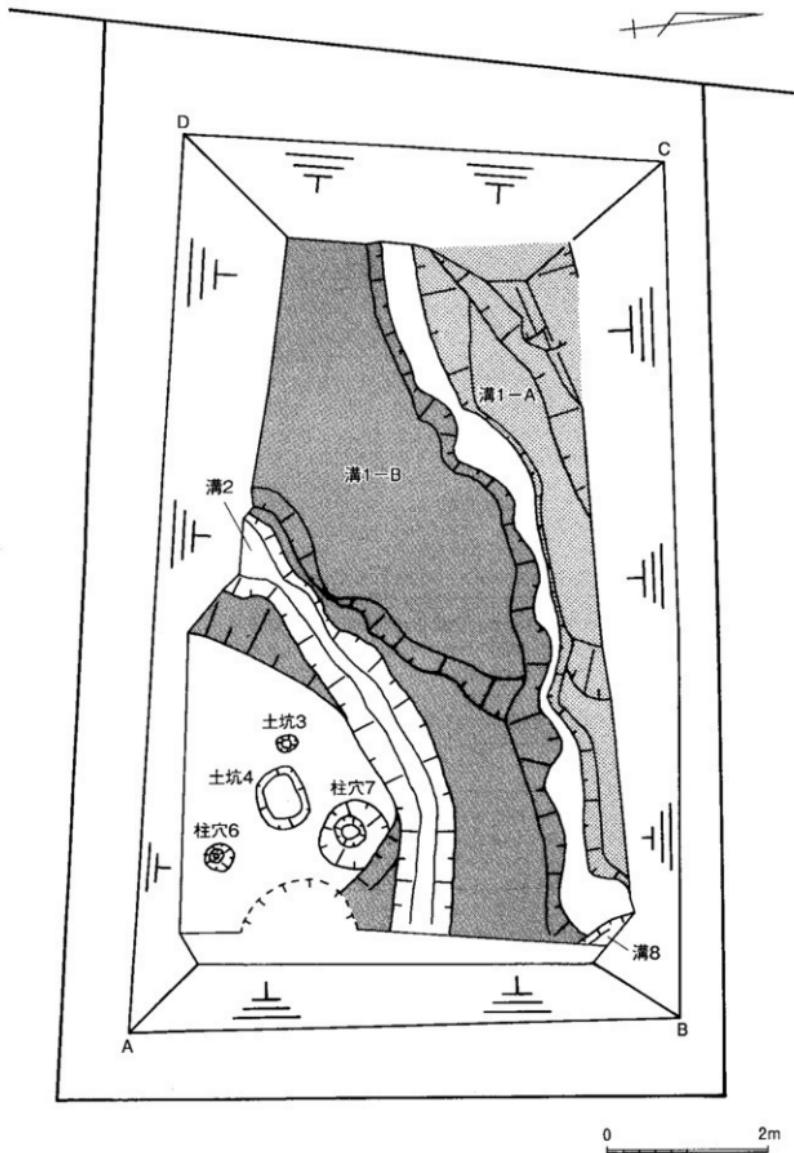
## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

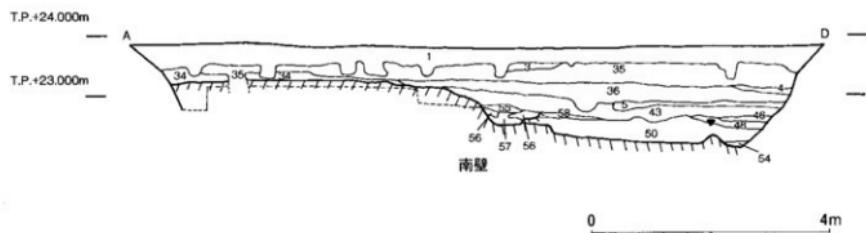
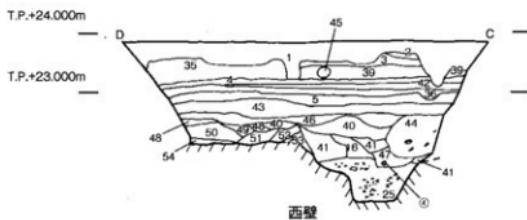
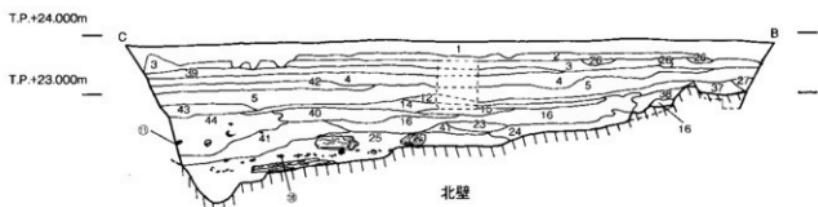
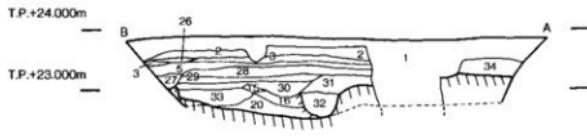
今回の発掘調査地区は、調査前の現状では宅地であった。西隣は府道であり、その府道の高さに合るように、耕土上に約0.2~0.4mの盛土がされていた。耕土下には床土が貼られており、その下層は、中世の包含層と考えられる灰黄褐色～黄褐色土層であった。その下層に、古墳時代の包含層と考えられる褐色土層があり、その下層は地山と考えられる灰黄褐色土層であった。この上面が遺構面であり、古墳時代後期の遺構が検出された。

以下、各土層の説明を述べる（第5・6図、写真図版7-2-3）。

- 第1層：盛土 暗オリーブ褐色砂質土（25Y 3/3）時折第2層が混じる
- 第2層：耕土 黒褐色砂質土（25Y 3/1）
- 第3層：床土 にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/4）
- 第4層：包含層（中世）灰黄褐色砂質土（10YR 6/1）炭化物が若干混じる。粘性は第5層よりやや強い。しまり中の弱程度。
- 第5層：包含層（古墳）褐色砂質土（10YR 4/6）しまり中程度。粘性中程度。
- 第6層：溝2埋土 暗褐色砂質土（10YR 3/4）しまり中程度。粘性はあまりない。
- 第7層：溝2埋土 暗褐色砂質土（10YR 3/3）しまり中程度。粘性は第6層より強い。
- 第8層：溝2埋土 黑褐色砂質土（10YR 2/3）しまり中程度。粘性は第7層より強い。
- 第9層：溝2埋土 黑褐色砂質土（10YR 2/2）しまり中の弱。粘性は8層より強く、中の強程度。
- 第10層：溝2埋土 黑褐色砂質土（25Y 3/1）しまりは第9層より若干弱い。粘性は第9層と同程度。
- 第11層：溝2埋土 黄灰色砂質土（25Y 4/1）一部同色の粗砂が混じる。しまりは第10層より弱く、粘性は第9層より強い。
- 第12層：溝1埋土（溝1-B段階）灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）しまりは第9層より弱く、粘性は同程度。
- 第13層：溝1埋土（溝1-B段階）第14層に、明黄褐色砂質土（10YR 6/6）が混じる。
- 第14層：溝1埋土（溝1-B段階）黄灰色砂質土（25Y 4/1）しまりは第12層より若干なく、粘性は第12層より強い。
- 第15層：溝1埋土（溝1-B段階）褐灰色細砂（10YR 6/1）しまりがない。粘性弱い。
- 第16層：溝1埋土（溝1-B段階）黄灰色粗砂（25Y 6/1）しまりは第15層よりない。粘性がない。土器・流木を多く含む。
- 第17層：溝1埋土（溝1-B段階）黄灰色細砂（25Y 6/1）所々に第18層のブロックが混じる。しまり・粘性は第15層と同じ。
- 第18層：溝1埋土（溝1-B段階）オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）粘性強い。しまり中程度。
- 第19層：溝1-B埋土 暗灰黃褐色砂質土（25Y 5/2）粗砂混じり。しまり弱め。粘性あまりない。
- 第20層：溝1-B埋土 にぶい黄色粗砂（25Y 6/4）粒子は第16層より細かい。しまり・粘性は第19層より弱い。
- 第21層：溝1-A埋土 灰色砂質土（5Y 4/1）しまり・粘性は中程度。
- 第22層：溝1-A埋土 オリーブ黒色粘質土（5Y 3/1）しまり中程度。粘性強い。
- 第23層：溝1埋土（溝1-B段階）灰色細砂（5Y 4/1）しまりあまりない。粘性弱い。
- 第24層：溝1-A埋土 黑褐色粘質土（25Y 3/1）第22層より粒子細かい。粘性は第22層より若干強く、しまりは同程度。
- 第25層：溝1-A埋土 灰色粗砂（5Y 5/1）しまり・粘性は第16層と同様。土器・流木・種子等を多量に含む。
- 第26層：遺構埋土 褐灰色砂質土（10YR 5/1）
- 第27層：溝8埋土 褐灰色細砂土（10YR 5/1）一部粗砂混じり。粘性弱く、しまりは弱め。
- 第28層：包含層（古墳）褐色砂質土（7.5YR 4/4）しまり・粘性中程度。
- 第29層：包含層（古墳）にぶい黄褐色砂質土（10YR 4/3）第12層に似る。粘性は第28層より強く、しまりは同程度。
- 第30層：包含層（古墳）灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）しまりは第28層と同程度。粘性は第29層よりさらに強め。
- 第31層：包含層（古墳）暗灰黃褐色砂質土（25Y 4/2）しまりは第28層よりやや弱く、粘性は同程度。
- 第32層：溝2埋土 黑褐色砂質土（25Y 3/1）しまりは第31層と同様。粘性はやや強い。
- 第33層：溝1-B埋土 褐灰色砂質土（10YR 4/1）しまりは第30層よりやや弱い。粘性は第30層よりやや強い。
- 第34層：包含層（中世）黄褐色砂質土（10YR 5/6）しまり中程度、粘性やや強い。
- 第35層：包含層（中世）褐灰色砂質土（10YR 5/1）しまりは第34層よりやや弱く、粘性は同程度。



第4図 調査地区平面図



第5図 調査地区断面図

第36層：包含層（中世）褐色灰色砂質土（7.5YR 5/1）しまりは第35層と同程度。粘性は第35層よりやや強い。

第37層：溝1埋土、灰黃褐色砂質土（10YR 4/2）しまり・粘性とも中程度で、第5層と同程度。

第38層：溝1埋土（溝1-B段階）褐色灰色砂質土（10YR 4/1）しまり中程度、粘性やや強い。第14層に似る。

第39層：包含層（中世）黄褐色砂質土（10YR 5/6）しまりやや弱い。粘性は第4層と同程度。

第40層：溝1埋土（溝1-B段階）オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）粗砂混じり。粒子が荒い。しまりやや強く、粘性弱い。

第41層：溝1埋土（溝1-B段階）灰色細砂（5Y 5/1）第23層より粒子が荒め。しまりやや弱く、粘性弱い。流木・土器含む。

第42層：包含層（中世）黄褐色砂質土（10YR 5/6）しまりは第4層よりやや強く、第5層と同程度。粘性は第5層と同程度。

第43層：包含層（古墳）褐色砂質土（7.5YR 4/4）しまりは第5層よりやや弱く、粘性は第5層よりやや強い。

第44層：溝1埋土（溝1-B段階）黒色粘質土（N 2/0）しまり中程度。粘性強め。炭化物を非常に多量に含む。土器を多量に含む。

第45層：機乱土 黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）

第46層：溝1埋土（溝1-B段階）暗褐色砂質土（10YR 3/3）粘性・しまりとも第43層と同程度。炭化物が幾らか混じる。

第47層：溝1埋土（溝1-B段階）オリーブ黒色細砂（5Y 3/1）しまり弱く、粘性も弱い。土器・木材等を多く含む。

第48層：溝1-B埋土 黑褐色砂質土（2.5Y 3/2）しまり・粘性とも中程度。

第49層：溝1-B埋土 オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）しまりは第48層よりやや弱く、粘性は第48層よりやや強い。

第50層：溝1-B埋土 暗灰黃色粗砂（2.5Y 5/2）しまりがあまりなく、粘性がない。所々細砂が混じる。土器が多く含まれる。第16層に似る。

第51層：溝1-B埋土 黄灰色細砂（2.5Y 4/1）所々粗砂混じる。しまりは弱いが、第50層よりは強い。

第52層：溝1埋土（溝1-B段階）黄褐色粗砂（2.5Y 4/6）粒子は第50層や第16層、第25層より細かい。しまりはそれより強め。

第53層：溝1埋土（溝1-B段階）黒褐色細砂（2.5Y 3/1）しまりはやや強め。

第54層：溝1-B埋土 黄灰色粘質土（2.5Y 5/1）しまりはやや強い。粘性強。

第55層：溝2埋土 暗灰黃色砂質土（2.5Y 4/2）しまりは第43層と同程度。粘性は第43層よりやや強い。

第56層：溝2埋土 黄灰色粗砂（2.5Y 4/1）しまりは第55層よりやや強く、粘性は第55層より強い。

第57層：溝2埋土 黄灰色粗砂（2.5Y 4/1）しまり弱め。

第58層：溝1-B埋土 灰色細砂（5Y 5/1）しまり弱め、粘性なし。

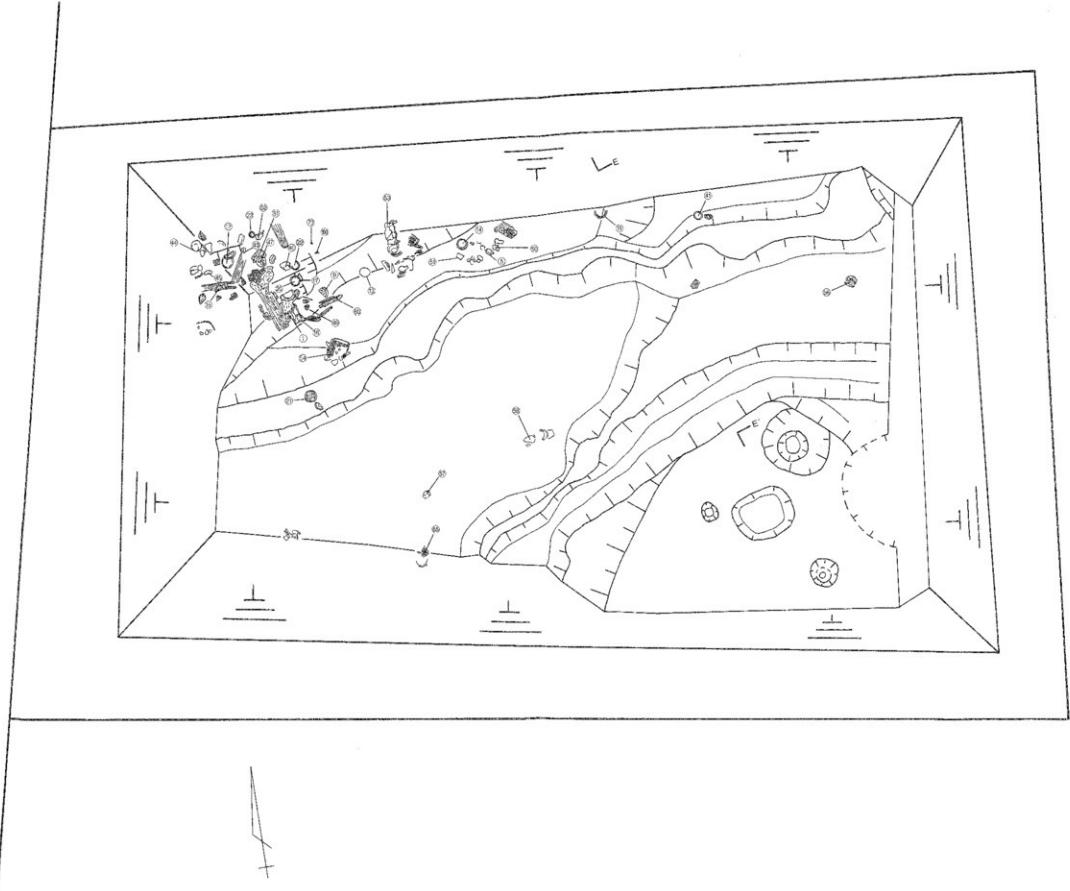
（實盛）

## 第2節 遺構

今回の調査で確認した遺構は、すべて古墳時代後期の遺構で、溝、柱穴、土坑がみられた（第4図）。遺構面の標高は調査区南西隅でT.P.+23.180mであった。以下、それぞれの遺構について遺構番号順に詳述する。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。実際、柱穴6と7は当初土坑として取り扱っていたものである。遺構番号5は、調査中に溝1-Bの一部であることが判明したため、欠番である。

溝1-A（写真図版2～5・6・1・7-1）検できた長さ約8.5m、幅約2m、深さが最大約1.8mである。確認できた溝の東の端で、上端がT.P.+23.064m、下端がT.P.+22.662m、調査区西端で、残存部分の上端がT.P.+22.290m、溝の下端がT.P.+21.160mであった。調査地区内の北側を、ほぼ東から西へと流れる溝である。特に調査地区的北西隅付近では一段深くなり、遺物が多量に含まれていた（第6図）。須恵器蓋壺・高壺・壺（第7図）、土師器甕・壺・壺・鉢・羽釜・瓶（第9～11図）、製塙土器（第13図-60～64）、韓式系土器（第13図-65、66、68、72）、ミニチュア土器（第14図-73～76）、土鍤（第14図-77）、円筒形土製品（第14図-79）、剣形木製品（第14図-80）、木製龜（第14図-81）、滑石製白玉（第15図-82～95）、土玉（第15図-96、97）、ガラス小玉（第15図-98）、滑石製勾玉（第15図-100）、滑石製有孔円盤（第15図-101、102）、滑石製紡錘車（第15図-103）、建築部材、柱材などが出土した。

溝1-B（写真図版2・6・7-1）検出できた長さ約9m、幅約6.75m以上、深さ約1mである。調査区東側で、上端T.P.+23.171m、下端T.P.+22.621m、南西側で、上端T.P.+23.140m、下端



第6図 遺物出土状況図

T.P.+  
23.00m  
E  
N  
W  
S

0 2m

T.P.+22.120mであり、調査地区内ほぼ中央を東から南西へと流れる。ここでもまとった量の遺物が出土した（第6図）。出土遺物は、須恵器蓋・高坏（第8図-27~31）、土師器甕・鉢・瓶（第12図）、製塩土器、韓式系土器（第13図-67、69~71）、滑石製白玉（第15図-99）などがあった。

溝1-AとBは、上面で検出した際は溝1としていたものである。しかし、断面観察の結果、溝1-Aがある程度埋まった段階で、溝1-Bが溝1-Aを広げる形で掘削されていたため（第6図・断面、写真図版7-3）、枝番号で分けることとした。

溝2（写真図版6・7）検出できた長さ約5.9m、幅約0.5~1m、深さ約0.45mである。調査区東端での上端の標高はT.P.+23.144m、下端はT.P.+22.540m、調査区南西側では上端がT.P.+22.838m、下端がT.P.+22.497mであった。東から南西方向へと流れる溝である。溝1-Bを切る形で検出しておらず、溝1-Bより新しい遺構である。出土遺物としては、須恵器蓋・高坏（第8図-32、33）、土師器片などがあった。

土坑3（写真図版6）直径約0.25m、深さ約0.2mで不正円形を呈する。上端の標高はT.P.+23.167m、下端はT.P.+22.970mであった。遺物は出土しなかった。

土坑4（写真図版6）長径約0.8m、短径約0.65mの楕円形である。深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+23.164m、下端はT.P.+23.068mであった。遺物は出土しなかった。

柱穴6（写真図版6）直径約0.4m、深さ約0.15mの円形を呈する。深さ約0.05mの位置で、柱穴の中央よりやや南西の位置が直径約0.17mの大きさで1段深く掘られている。上端の標高はT.P.+23.170m、下端はT.P.+23.022mであった。遺物は出土しなかった。

柱穴7（写真図版6）直径約0.9m、深さ約0.33mの円形を呈する遺構である。深さ約0.15~0.2mの位置で、柱穴の中央よりやや南西の位置が直径約0.4mの大きさで1段深く掘られている。上端の標高はT.P.+23.167m、下端はT.P.+22.839mであった。柱穴が溝1-Bに切られているため、溝1-Aを、溝1-Bとして広げるよりも前に掘られた遺構である。

溝8（写真図版6）調査地区内に一部のみがかっていたため、全容は不明であるが、検出できた数値で長さ約1.25m以上、幅約0.5m以上、深さ約0.28mを測る。上端の標高はT.P.+23.107m、下端の標高はT.P.+22.900mであった。溝1-Bを切る形で検出しておらず、溝1-Bより新しい遺構である。外面にタテハケのある土師器小片が出土した。

（實盛）

### 第3節 出土遺物

#### 1. 須恵器

##### 溝1-A出土遺物

1 高坏蓋 口径：12.0cm。器高：5.1cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。I型式5段階（TK47型式）。（第6図-①・第7図-1・写真図版8-1-1）

2 高坏蓋 口径：11.4cm。器高：4.3cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。I型式5段階（TK47型式）。（第7図-2・写真図版8-1-2）

3 坏蓋 口径：12.1cm。器高：5.0cm。厚さ：0.3~0.7cm。色調：内・断面は灰色（10Y 8/2）、外面は灰色（N 7/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。I型式5段階（TK47型式）。（第7図-3・写真図版8-1-3）

4 坏身 口径：10.4cm。器高：4.9cm。厚さ：0.2~0.8cm。色調：内・外・断面は灰色（N 7/）。胎土：密。直径1~2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。I型式5段階（TK47型式）。（第5図-④・第7図-4・写真図版8-1-4）

5 坏身 口径：10.7cm。器高：4.8cm。厚さ：0.3~0.6cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰赤色（7.5R 4/2）。胎土：密。直径1~3mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。外外面に白色の斑点（含有物か）が多くみられる。I型式5段階（TK47型式）。（第6図-⑤・第7図-5・写真図版8-1-5）

6 坏身 口径：11.4cm。器高：4.5cm（復元）。厚さ：0.2~0.6cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1~2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。I型式5段階（TK47型式）。（第7図-6・写真図版8-1-6）

7坏蓋 口径：13.3cm。器高：5.2cm。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。II型式1段階（MT15型式）。（第7図-7・写真図版8-2-7）

8坏蓋 口径：13.5cm。器高：4.9cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は灰色（N 5/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：3/4。II型式1段階（MT15型式）。（第7図-8・写真図版8-2-8）

9坏蓋 口径：14.3cm。器高：4.2cm。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。天井部内面に同心円文の当具痕あり。外面の一部に赤色顔料（10R 4/8）が塗られている点から祭祀具として使用したものと考える。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑨・第7図-9・巻頭写真図版・写真図版8-2-9）

10坏蓋 口径：13.1cm。器高：4.1cm。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。内面の一部に焼成時のものと思われる付着物（灰か）がみられる。内外面全体に赤色顔料（10R 4/8）が塗られている点から祭祀具として使用したものと考える。II型式2段階（TK10型式）。（第7図-10・巻頭写真図版・写真図版8-2-10）

11坏蓋 口径：15.5cm。器高：3.4cm。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外面は青灰色（5PB 5/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。天井部内外面に乾燥時のひび割れがみられ、焼成時に大きく変形したものと思われる。天井部内面に同心円文の当具痕がみられる。II型式2段階（TK10型式）。（第5図-⑪・第7図-11・写真図版8-2-11）

12坏蓋 口径：14.5cm。器高：3.7cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は青灰色（5B 5/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。外面に黒色の付着物がみられる。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑫・第7図-12・写真図版8-2-12）

13坏蓋 口径：13.5cm。器高：4.1cm。厚さ：0.5～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。内面の大半と外面の一部に煤が付着。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑬・第7図-13・写真図版8-2-13）

14坏身 口径：13.7cm。器高：4.7cm。厚さ：0.3～1cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：密。直径1mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。外面全体に煤が付着。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑭・第7図-14・写真図版8-2-14）

15坏身 口径：12.3cm。器高：4.5cm。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は灰赤色（7.5R 6/2）。胎土：緻密。直径1mmの白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：3/4。若干変形している。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑮・第7図-15・写真図版8-2-15）

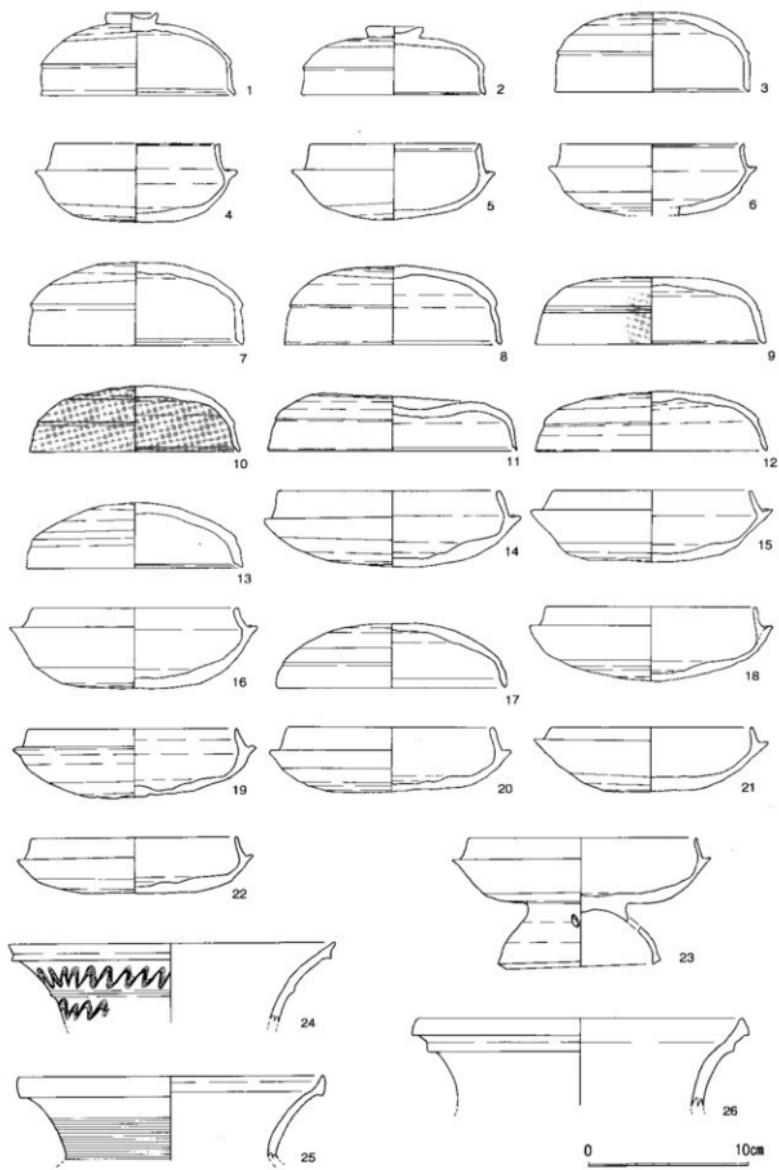
16坏身 口径：12.7cm。器高：5.1cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1～2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。内面の一部に灰黄褐色（10YR 5/2）、外面の一部に灰白色（7.5Y 8/1）の付着物がみられる。底部内面に同心円の当具痕がみられる。II型式2段階（TK10型式）。（第6図-⑯・第7図-16・写真図版8-2-16）

17坏蓋 口径：14.2cm。器高：4.0cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内・外・断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：やや不良。残存度：2/3。II型式3段階（TK10型式新段階）。（第6図-⑰・第7図-17・写真図版9-1-17）

18坏身 口径：13.2cm。器高：4.7cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は暗赤灰色（7.5R 4/1）。胎土：密。直径1mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。底部内面に同心円の当具痕がみられる。II型式3段階（TK10型式新段階）。（第5図-⑲・第7図-18・写真図版9-1-18）

19坏身 口径：13.1cm。器高：4.3cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）。焼成：良好。残存度：完形。II型式3段階（TK10型式新段階）。（第6図-⑲・第7図-19・写真図版9-1-19）

20坏身 口径：12.7cm。器高：4.1cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）。胎



第7図 出土遺物（1）

土：密。直径1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。底部外面に降灰がみられる。II型式3段階（TK10型式新段階）。（第6図-②・第7図-20・写真図版9-1-20）

21坏身 口径：12.5cm。器高：4.0cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）、断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1～2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。底部外面に降灰がみられる。若干変形している。II型式4段階（TK43型式）。（第6図-②・第7図-21・写真図版9-1-21）

22坏身 口径：12.8cm。器高：3.5cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1～2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。外面に自然軸がみられる。II型式4段階（TK43型式）。（第6図-②・第7図-22・写真図版9-1-22）

23高坏 口径：14.2cm。底径：9.2cm。器高：8.1cm。厚さ：0.2～1.4cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1～2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。若干変形している。梢円形の透かしが脚部に3箇所あけられている。II型式3段階（TK10型式新段階）。（第6図-②・第7図-23・写真図版9-1-23）

24長壺壺 口径：20.4cm。器高：5.0cm（残存）。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・断面は灰白色（N 7/）、断面は灰色（N 5/）。胎土：緻密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内面に降灰がみられる。口頸部は外上方にのび口縁端部に至る。口縁端部付近と頸部の中央付近の外面上に断面三角形の凸線を巡らせ、それぞれの下方に波状文を巡らせていている。I型式3段階（TK208型式）。（第7図-24・写真図版8-1-24）

25広口壺 口径：19.0cm。器高：5.2cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内面は灰白色（N 7/）、外面は灰色（N 5/）、断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内面一部に降灰がみられる。口頸部は外上方にのび端部で上下に伸ばす。頸部外面に回転カキメ調整を巡らせている。II型式1段階（MT15型式）。（第7図-25・写真図版8-2-25）

26広口壺 口径：20.4cm。器高：5.5cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は赤灰色（7.5Y 5/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口頸部は外上方にのび端部で上下に伸ばす。口縁端部の下方の外面上に断面三角形の凸線を巡らせてている。I型式5段階（TK47型式）。（第7図-26・写真図版8-1-26）

## 溝1-B出土遺物

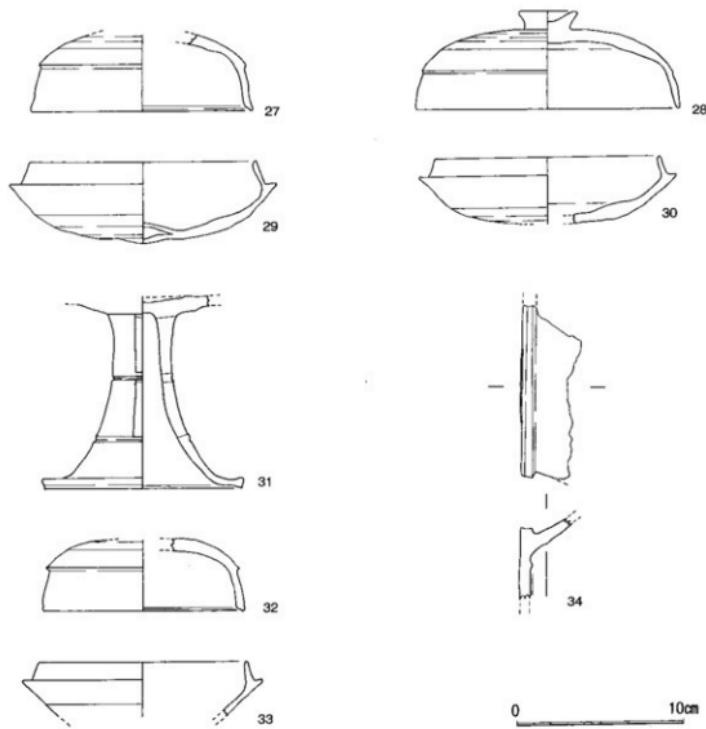
27坏蓋 口径：13.4cm。器高：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。I型式3段階（TK208型式）。（第8図-27・写真図版8-1-27）

28高坏蓋 口径：15.6cm。器高：5.9cm。厚さ：0.2～1.3cm。色調：内・外・断面は灰色（N 7/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/4。II型式1段階（MT15型式）。（第8図-28・写真図版8-2-28）

29坏身 口径：13.4cm。器高：4.9cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内面は灰色（N 5/）、外面は灰色（7.5Y 6/1）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1～3mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。底部は粘土中の空気により火彫れがみられる。II型式2段階（TK10型式）。（第8図-29・写真図版8-2-29）

30坏身 口径：13.4cm。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.2～0.9cm。色調：内・断面は灰白色（N 7/）、外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。II型式4段階（TK43型式）。（第8図-30・写真図版9-1-30）

31高坏 底径：11.8cm。器高：11.6cm（残存）。厚さ：0.4～1.2cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。脚部には縦一列に台形の透かしが2段に3箇所あけられ、それぞれの下方に凹線を巡らせてている。堆部は上方に伸ばしている。II型式4段階（TK43型式）。（第8図-31・写真図版9-1-31）



第8図 出土遺物（2）

#### 溝2出土遺物

32坏蓋 口径：12.0cm。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.8cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。I型式5段階（TK47型式）。（第8図-32・写真図版8-1-32）

33坏身 口径：12.4cm。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・断面は灰色（N 6/）、外面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面に降灰がみられ、受部外面に他の製品との融着痕がみられる。II型式4段階（TK43型式）。（第8図-33・写真図版9-1-33）

#### 包含層出土遺物

34樽形底 小片であるため復元法量などは不明である。厚さ：0.4～1.0cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面は赤褐色（10R 5/3）。胎土：緻密。焼成：良好。I型式3段階（TK208型式）。（第8図-34・写真図版8-1-34）

## 2. 土器部

### 溝1-A出土遺物

35小型壺 口径：8.0cm。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。体部外面の一部に粘土紐痕がみられる。（第9図-35・写真図版9-2-35）

36小型壺 口径：8.0cm。器高：5.4cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整・内面はナデ調整を施している。（第9図-36・写真図版9-2-36）

37小型鉢 口径：9.0cm。器高：5.0cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施しているが、内外面ともに粘土紐痕がみられる。（第9図-37・写真図版9-2-37）

38小型鉢 口径：8.6cm。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。（第9図-38・写真図版9-2-38）

39小型鉢 口径：10.6cm。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施し、外面は斜め方向にヘラナデ調整を施していると思われる。体部外面には指痕痕がみられる。（第9図-39・写真図版9-2-39）

40短頸壺 口径：9.0cm。器高：5.4cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は橙色（5YR 7/8）。胎土：直径1mm以下の赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：3/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面は丁寧なナデ調整を施し、外面は斜め方向にヘラナデ調整を施していると思われる。（第9図-40・写真図版9-2-40）

41壺 口径：10.8cm。器高：3.8cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を多く、金雲母を少量、直径2mmの大い小石を少量含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。体部外面に粘土紐痕がみられる。（第6図-⑪・第9図-41・写真図版9-2-41）

42碗 口径：8.3cm。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。口縁部外面に粘土紐痕がみられる。（第9図-42・写真図版9-2-42）

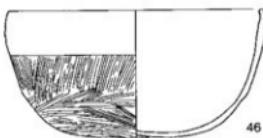
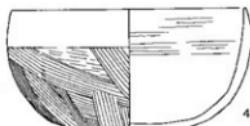
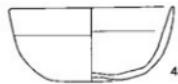
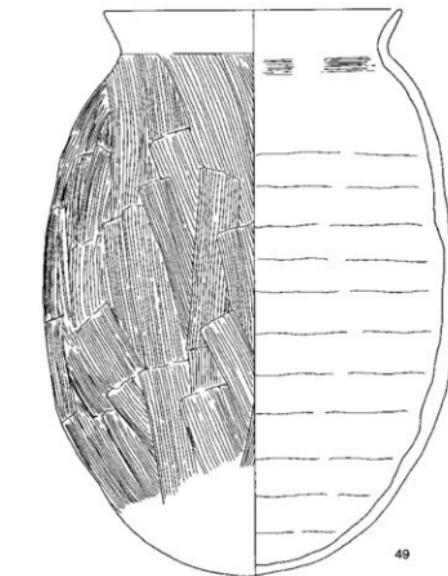
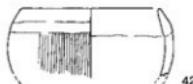
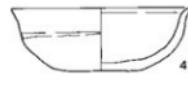
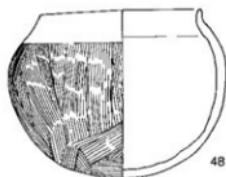
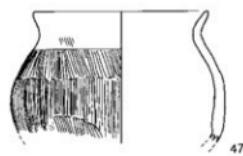
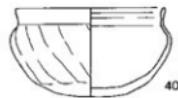
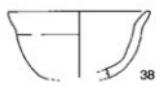
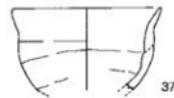
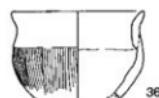
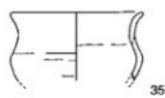
43碗 口径：10.0cm。器高：4.5cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：直径1～3mmの白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。内面の一部に煤が付着している。（第6図-⑬・第9図-43・写真図版9-2-43）

44碗 口径：11.8cm。器高：5.2cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内面・外面端部はヨコナデ調整を施している。体部内外面はナデ調整を施しているが粘土紐痕が顯著にみられる。（第6図-⑭・第9図-44・写真図版9-2-44）

45碗 口径：14.2cm。器高：7.5cm。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面は斜めハケ調整を施している。（第6図-⑮・第9図-45・写真図版9-2-45）

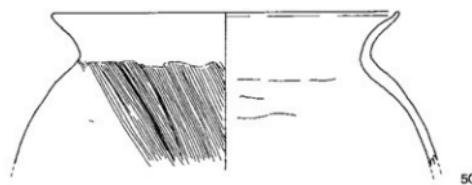
46碗 口径：15.4cm。器高：7.8cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面上半部はタテハケ調整・下半部は斜めハケ調整を施している。外面に煤が付着している。（第6図-⑯・第9図-46・写真図版9-2-46）

47小型壺 口径：10.5cm。器高：8.0cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面はに

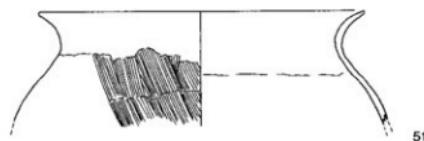


0 10cm

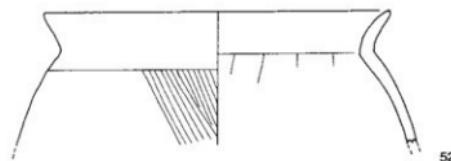
第9図 出土遺物 (3)



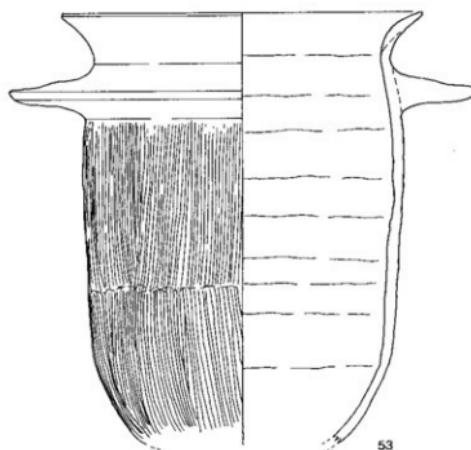
50



51



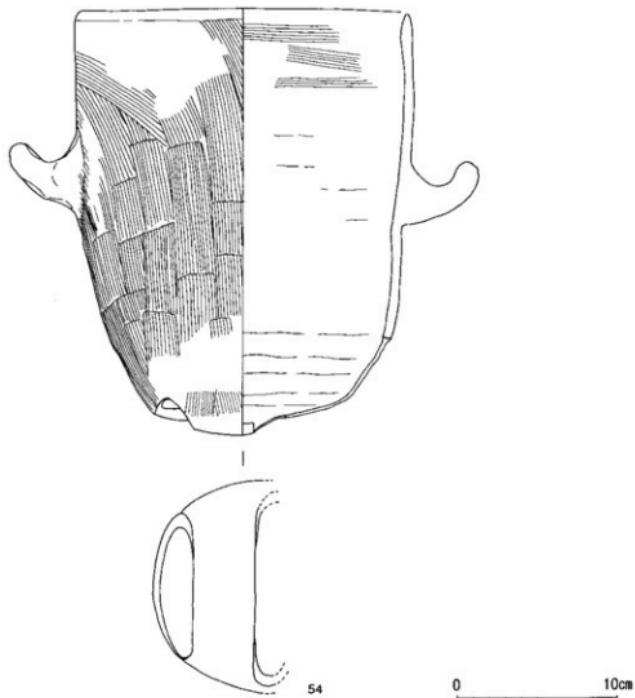
52



53

0 10cm

第10図 出土遺物 (4)



第11図 出土遺物（5）

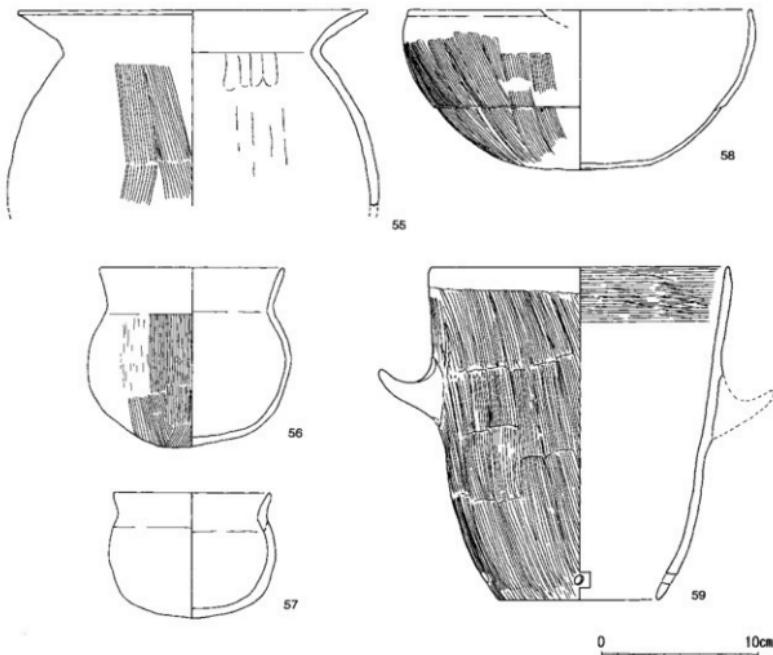
ぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。（第6図-⑦・第9図-47・写真図版9-2-47）

48無頸壺 口径：9.7cm。器高：10.2cm。厚さ：0.3~0.6cm。色調：内面は橙色（5YR 6/6）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：5/6。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。（第9図-48・写真図版9-2-48）

49長胴壺 口径：17.9cm。器高：34.1cm。厚さ：0.4~1.1cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施しており、底部外面はハケメが摩耗している。体部内面には粘土縫痕がみられる。体部外面には全体的に口縁部下まで煤が付着しており、内面は底部から1/3程度のところまで灰褐色（7.5YR 4/2）の付着物がみられる。（第6図-⑨・第9図-49・写真図版10-1-49）

50壺 口径：20.8cm。器高：9.5cm（残存）。厚さ：0.2~0.9cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内面はヘラナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。体部内面に粘土縫痕がみられる。（第6図-⑩・第10図-50・写真図版10-1-50）

51壺 口径：19.6cm。器高：6.9cm（残存）。厚さ：0.2~0.4cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。



第12図 出土遺物（6）

口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヘラナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。（第6図-5⑤・第10図-51・写真図版10-1-51）

52壺 口径：20.8cm。器高：8.0cm（残存）。厚さ：0.4～0.9cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヘラナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。（第6図-5⑥・第10図-52・写真図版10-1-52）

53羽釜 口径：21.6cm。鍔径：28.0cm。器高：25.9cm（残存）。厚さ：0.4～2.3cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。体部内面に粘土紐痕がみられる。体部外面の鍔より下半部には全面に煤が付着している。（第6図-5⑦・第10図-53・写真図版10-1-53）

54瓶 口径：20.3cm。底径：13.5cm（復元）。器高：26.9cm。厚さ：0.5～3.9cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：9/10。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヨコハケ調整後ナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。体部内面に粘土紐痕がみられ、全面に煤が付着している。底部の孔は長楕円形で、中央の孔は長く、それを挟んで左右に短い孔を1箇所ずつ開けている。（第6図-5⑧・第11図-54・写真図版10-1-54）

#### 溝1-B出土遺物

55壺 口径：22.2cm。器高：12.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面はにぶい黄

橙色（10YR 7/3）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。体部内面頸部にはユビオサエ痕がみられ、外面には煤が付着している。（第6図-55・第12図-55・写真図版10-1-55）

56小型甕 口径：11.6cm。器高：11.5cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。（第6図-56・第12図-56・写真図版9-2-56）

57小型甕 口径10.0cm。器高：8.0cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はヘラケズリ後ナデ調整を施している。（第6図-57・第12図-57・写真図版9-2-57）

58片口鉢 口径21.8cm。器高：10.3cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は赤色（10R 5/8）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。腹部の中央付近で2段につないで形成している。（第6図-58・第12図-58・写真図版9-2-58）

59瓶 口径：19.0cm、底径：10.3cm。器高：21.3cm。厚さ：0.4～4.2cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部端部外面はヨコナデ調整・内面はヨコハケ調整、体部内面はナデ調整・外面はタテハケ調整を施している。底部は開いており、底から1.3cm上方に直径0.5cmの円孔を円周に沿って等間隔に4箇所開けている。市内では同形のものが木間池北方遺跡（96-1）の溝3から出土している。（第12図-59・写真図版10-1-59）

### 3. 製塙土器

#### 溝1-A出土遺物

60口径4.6cm。器高：7.4cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）、外・断面は灰色（N 6/）。胎土：蜜。焼成：良好。残存度：1/5。体部内面はユビオサエ痕がみられ・外面は平行文のタタキ調整を施している。5世紀代のものと考える。（第13図-60・写真図版10-2-60）

61器高：7.4cm（残存）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）。胎土：直径1～3mmの砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。6世紀代のものと考える。（第13図-61・写真図版10-2-61）

62口径6.0cm。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：蜜。焼成：良好。残存度：1/5。体部内面はユビオサエ痕がみられ・外面は平行文のタタキ調整を施している。5世紀代のものと考える。（第13図-62・写真図版10-2-62）

63口径5.0cm。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は橙色（2.5YR 6/8）。胎土：蜜。焼成：良好。残存度：1/5。体部内外面はナデ調整を施している。5世紀代のものと考える。（第13図-63・写真図版10-2-63）

64底径3.6cm。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外・断面は黒色（N 2/）。胎土：直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。5世紀代のものと考える。（第13図-64・写真図版10-2-64）

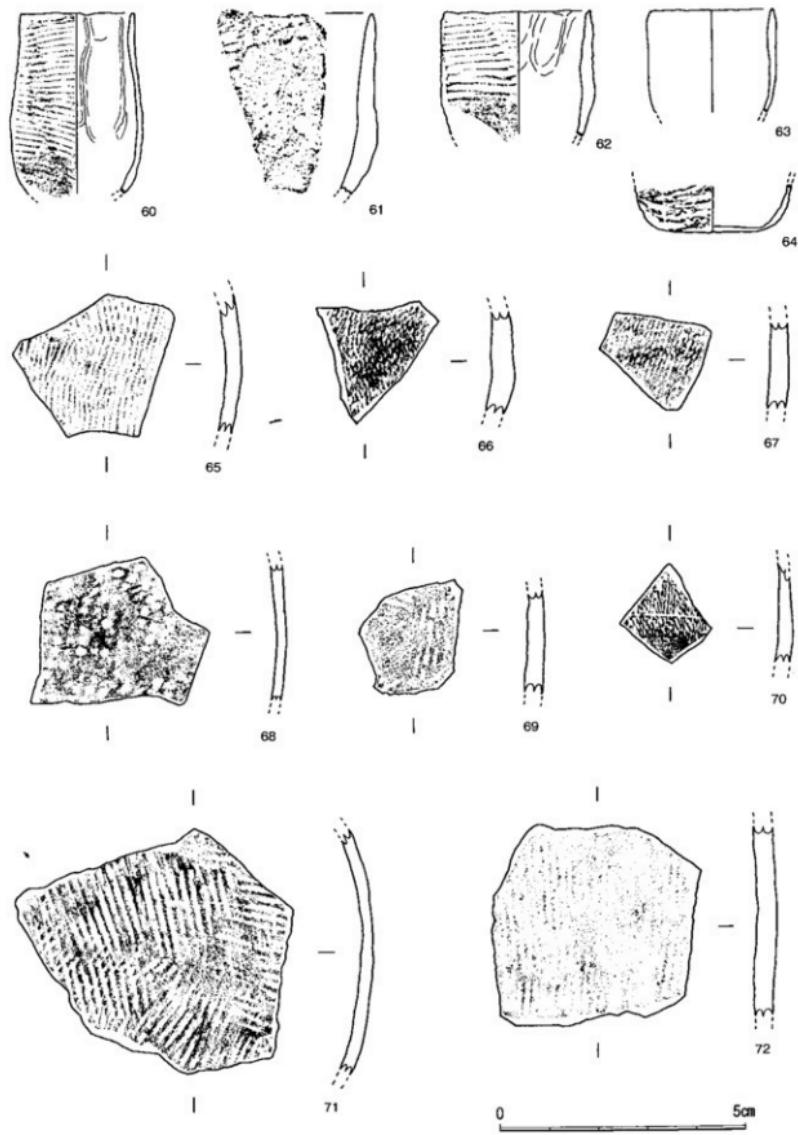
### 4. 韩式系土器

#### 溝1-A出土遺物

65厚さ：0.5～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）、断面はにぶい赤橙色（10R 6/3）。胎土：蜜。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。（第13図-65・写真図版10-2-65）

66厚さ：0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は繩席文のタタキ調整を施している。（第13図-66・写真図版10-2-66）

67厚さ：0.7～0.8cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存



第13図 出土遺物 (7)

度：小片。体部外面は繩席文のタタキ調整を施し、2条の沈線を巡らせている。（第13図-67・写真図版10-2-67）

68厚さ：0.4～0.5cm。色調：内面はにぶい褐色（7.5YR 6/3）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3）。胎土：直径1mm以下の砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は格子文のタタキ調整を施している。（第13図-68・写真図版10-2-68）

#### 溝1-B出土遺物

69厚さ：0.6～0.8cm。色調：内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）、外面は黒色（N 2/）。胎土：直径1～2mmの砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。（第13図-69・写真図版10-2-69）

70厚さ：0.5～0.6cm。色調：内・外面は青灰色（5B 6/1）、断面は明赤灰色（2.5YR 7/2）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は繩席文のタタキ調整を施し、1条の沈線を巡らせている。（第13図-70・写真図版10-2-70）

71厚さ：0.4～0.5cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：黒。金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。（第13図-71・写真図版10-2-71）

72厚さ：0.8～0.9cm。色調：内面は黒褐色（2.5Y 3/1）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：直径1mm以下の砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は平行文のタタキ調整を施している。外面全面に煤が付着している。（第13図-72・写真図版10-2-72）

#### 5. 土製品

##### 溝1-A出土遺物

73ミニチュア土製品 口径：3.4cm。器高：1.8cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：3/4。体部外面に粘土粗痕がみられる。（第6図-73・第14図-73・写真図版10-2-73）

74ミニチュア土製品 口径：3.6cm。器高：2.8cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面は灰褐色（7.5YR 6/2）、外・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。（第14図-74・写真図版10-2-74）

75ミニチュア土製品 口径：5.0cm。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面は灰褐色（7.5YR 5/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。（第14図-75・写真図版10-2-75）

76ミニチュア土製品 口径：6.0cm。底径：3.2cm。器高：3.9cm。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部内外面に粘土粗痕がみられる。（第14図-76・写真図版10-2-76）

77棒状土錘 長さ：4.0cm（残存）。幅：1.3～1.6cm。厚さ：1.3～1.5cm。色調：淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。端部に直径0.6cmの円孔を開けている。（第14図-77・写真図版10-2-77）

78棒状土錘 長さ：7.9cm。幅：1.4～1.6cm。厚さ：1.4～1.6cm。色調：灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。両端部に直径0.6cmの円孔を開けている。77・78ともに2000年に今回の隣接地の溝から出土したものと同形のものである。（第14図-78・写真図版10-2-78）

79円筒形土製品 〈ロート状部分〉直径：20.4cm。高さ：9.6cm。厚さ：0.5～3.4cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はタテハケ調整、端部はヨコナデ調整を施している。内面は粘土粗痕がみられる。ロート状に開いた部分から上方に向かって外径9.3cm筒状となる。筒状部分の内面には直径4.0cmの孔が上方に向かって開いている。内面の一部に煤が付着している。

〈筒状部分〉外径：8.6cm。内径：3.0cm。長さ：9.5cm（残存）。厚さ：3.0～3.6cm。色調：内面は



73



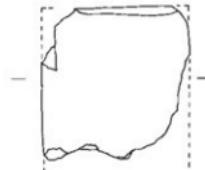
74



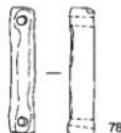
75



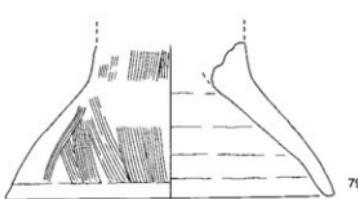
76



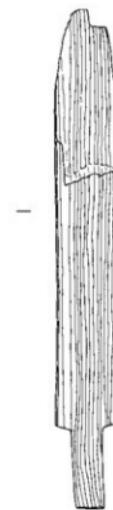
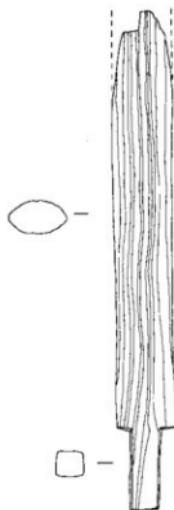
77



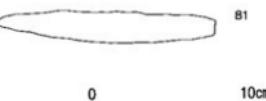
78



79



81



0 10cm

第14図 出土遺物 (8)

黄灰色（25Y 4/1）、外・断面は灰黄色（25Y 7/2）。胎土：直径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。内面の一部に煤が付着している。このロート状部分と筒状部分の破片には接合点はないが、形態や胎土などから同一のものであると考える。その用途については第4章まとめ述べる。（第14図-79・写真図版10-2-79）

## 6. 木製品

### 溝1-A出土遺物

80剣 身の長さ：31.0cm（残存）。刃部の長さ：26.0cm（残存）。幅：3.7～3.8cm。厚さ：2.0cm。柄部の長さ：5.0cm。幅：1.7～2.0cm。厚さ：0.8～1.5cm。身の先端部分は欠損しており、樹種については未鑑定である。金属製剣の模造品であり、祭祀具の一つであると考える。（第6図-80・第14図-80・写真図版4-2・写真図版11-1-80）

81鎧 身の長さ：18.5cm（残存）。最大幅：14.1cm（残存）。厚さ：0.3～1.9cm。柄の長さ：10cm（残存）。幅：2.0cm（残存）。厚さ：1.5cm（残存）。一本づくりの小型の鎧である。身の一部と柄の大半が欠損しているため、直線的な柄が身と平行になるように作られたものであるか（I）、直線的な柄が身と鈍角になるように作られたものであるか（II）、また湾曲する柄が身と鈍角になるように作られたものであるか（III）などは不明である。しかし、身と柄の接点部分に突起状の部分がみられないことから（I）の可能性が高いと考える。また刃先に鉄製刃先を装着した痕跡は見られない。樹種については未鑑定であるがカシ類であると思われる。溝を掘削するために使用したものであると考える。（第6図-81・第14図-81・写真図版5-1・写真図版11-1-81）

## 7. 滑石製品・ガラス玉・土玉

### 溝1-A出土遺物

82滑石製白玉 直径：3.5mm。厚さ：2.0～2.5mm。（第15図-82・卷頭写真図版・写真図版11-2-82）

83滑石製白玉 直径：5.0～6.0mm。厚さ：3.0～4.5mm。（第15図-83・卷頭写真図版・写真図版11-2-83）

84滑石製白玉 直径：5.0～5.5mm。厚さ：3.0。（第15図-84・卷頭写真図版・写真図版11-2-84）

85滑石製白玉 直径：6.0mm。厚さ：3.0～3.5mm。（第15図-85・卷頭写真図版・写真図版11-2-85）

86滑石製白玉 直径：6.0mm。厚さ：3.0～3.5mm。（第15図-86・卷頭写真図版・写真図版11-2-86）

87滑石製白玉 直径：6.0mm。厚さ：2.5～3.5mm。（第15図-87・卷頭写真図版・写真図版11-2-87）

88滑石製白玉 直径：7.0～8.0mm。厚さ：3.5～5.5mm。（第15図-88・卷頭写真図版・写真図版11-2-88）

89滑石製白玉 直径：5.0mm。厚さ：3.0～3.5mm。算盤玉形。（第15図-89・卷頭写真図版・写真図版11-2-89）

90滑石製白玉 直径：7.0mm。厚さ：3.0～3.5mm。（第15図-90・卷頭写真図版・写真図版11-2-90）

91滑石製白玉 直径：4.5～5.0mm。厚さ：3.0～3.5mm。（第15図-91・卷頭写真図版・写真図版11-2-91）

92滑石製白玉 直径：5.0～6.0mm。厚さ：4.0～4.5mm。（第15図-92・卷頭写真図版・写真図版11-2-92）

93滑石製白玉 直径：5.0～5.5mm。厚さ：2.5～3.0mm。（第15図-93・卷頭写真図版・写真図版11-2-93）

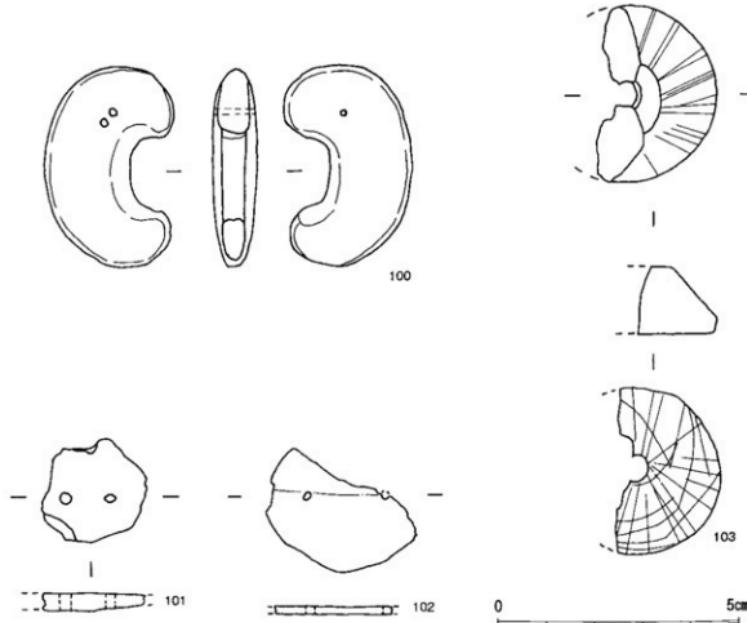
94滑石製白玉 直径：6.0～6.5mm。厚さ：4.0～4.5mm。（第15図-94・卷頭写真図版・写真図版11-2-94）

95滑石製白玉 直径：5.5～8.0mm。厚さ：6.5～7.0mm。（第9図-95・卷頭写真図版・写真図版11-2-95）

- ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -  
 |    |    |    |    |    |  
 82    83    84    85    86    87

- ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -  
 |    |    |    |    |    |  
 88    89    90    91    92    93

- ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -    - ◎ -  
 |    |    |    |    |    |  
 94    95    96    97    98    99



第15図 出土遺物 (9)

96土玉 直径：6.5mm。厚さ：6.0mm。（第15図－96・巻頭写真図版・写真図版11－2－96）

97土玉 直径：6.5mm。厚さ：6.0mm。（第15図－97・巻頭写真図版・写真図版11－2－97）

98ガラス小玉 直径：2.5mm。厚さ：2.0mm。淡いブルー色を呈している。（第15図－98・巻頭写真図版・写真図版11－2－98）

#### 溝1－B出土遺物

99滑石製白玉 直径：5.5mm。厚さ：3.0mm。（第15図－99・巻頭写真図版・写真図版11－2－99）

#### 溝1－A出土遺物

100滑石製勾玉 長さ：4.2cm。幅：1.8～2.4cm。厚さ：0.4～0.9cm。片方の孔は未貫通である。（第6図－⑩・第15図－100・巻頭写真図版・写真図版5－2・写真図版11－2－100）

101滑石製有孔円盤 長さ：2.1cm（残存）。幅：2.0cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。（第15図－101・巻頭写真図版・写真図版11－2－101）

102滑石製有孔円盤 長さ：3.0cm（残存）。幅：1.9cm（残存）。厚さ：0.1～0.15cm。（第15図－102・巻頭写真図版・写真図版11－2－102）

103滑石製紡錘車 上底部直径：1.5cm。下底部直径：3.6cm。厚さ：1.4cm。底部と側面に極細で極浅い線刻が施されている。（第5図－25・第15図－103・巻頭写真図版・写真図版11－2－103）その他に砥石・不明石製品・馬齒が出土している。（写真図版12－1）

（村上 始）

## 第4章まとめ

### 第1節 調査のまとめ

今回の調査成果を整理したい。今回確認した溝1-A・Bは、2000年の調査で（野島・村上2000）、今回の調査区の北隣で確認していた溝と一体のものであると考えられる。2000年の調査成果を合わせると、今回確認した溝の幅は、溝1-Aの段階で約2~4m、溝1-Bの段階で約8~10mであろう。1979年調査時のデータともほぼ整合的であり、今回の溝が、1979年調査の方形周溝状遺構の溝の続きと見て間違いないであろう（第16図）。また、今回はこの溝がこの地点でははじめ幅2~4mとやや狭い溝（溝1-A）であったのが後に幅が拡張されていた（溝1-B）ことが確認できた。また、この溝の埋没後には、この溝のあった場所の南端部分に再び浅い溝（溝2）を掘っていたことが分かった。この祭祀場が継続的に利用されていたことを裏付けるものといえる。さらに、今回の調査では祭祀場に大小2本の柱を立てていたことが確認できた。この点も、祭祀の形を考える上で重要な成果といえるだろう。

遺物は、特に溝1-Aから大量に出土した。中でも須恵器蓋坏は多く見られたが、これは1979年・2000年の調査時と同様であった（野島・村上2000）。中には赤色顔料の塗布されたものが存在することから、これらの蓋坏は祭祀で用いられたものである可能性が高い。

また、祭祀関連遺物が見られると同時に、甕や瓶などのいわゆる煮炊き具も多く見られたことは注目すべきである。これらの甕や瓶は、祭祀に用いられたものも確実に存在するものと思われる。奉獻物を調理したものであった可能性があるだろう。

渡来系の遺物としては韓式系土器のか、円筒形土製品があげられる。円筒形土製品は、これまで出土している大阪府陶邑・伏尾遺跡280-OO出土例（岸本・岡戸編1990）、大阪府寝屋川市楠遺跡出土例（瀬川・塩山1998）や、鳥根県出雲国府跡出土例（角田編2003）と比べ器壁が相対的に厚いものである。特に筒状部上部の口縁状の部分は、一見すると羽口のようにも見受けられるが、「口縁」部に被熱変形や付着物質等が見られないこと、筒状部の内部にのみ煤が付着していること等から、円筒形土製品の例に当たると判断した。用途は不明であるが、「煙突」状の用い方を考えたい。

今回出土した遺物の中で、特筆すべきものとしては、やはり一連の祭祀遺物があげられるだろう。滑石製品としては、勾玉、白玉、有孔円盤、紡錘車が出土した。このうち勾玉は、片面に穿孔を断念した跡があるものであった。また1点ではあるが、いわゆる空色のガラス小玉も出土した。土器類ではミニチュアの土器も何点か出土している。また木製品の中には、剣形木製品が見られた。この剣形木製品も祭祀場で用いられたものと考えられる。一連の祭祀の中に、模擬戦のような、武器が必要となる祭祀が含まれていた可能性が高い。

出土した木材の中には、一部が被熱・炭化しているものが多く見られた。祭祀場での祭祀が終わり、用いた祭祀具を周囲の溝に遺棄した後、祭祀場の施設を燃やして、燃え残った材をやはり周囲の溝に投棄した可能性があるだろう。溝内の、炭化物を多量に含む黒色粘質土層（第44層）は、祭祀場を燃やした後の炭化物が集中して堆積したものである可能性がある。

出土遺物からは、少なくともTK43型式期までこの場所で祭祀が行われていた可能性が高い。

以上のように、今回発掘した調査地は、これまでの調査で見つかっていた古墳時代の祭祀場とそれを取り巻く溝の続きであり、この地点においては溝には少なくとも二つの段階差があることと、祭祀場に柱が立っていたことが新たに分かった。

今回の調査地からわかる祭祀の状況は、柱の立てられた祭祀場で剣形木製品を用いた模擬戦の舞が舞われ、その傍らで調理された多くの奉獻物が須恵器に入れられ捧げられている、といったようなものであっただろう。1979年の調査成果からは、その際には馬の犠牲をささげる行為も行われたものと考えられる。そして、それらの祭祀が終わると、祭祀に用いられた器物は溝へ遺棄され、立てられた柱などの構造物も焼かれてその残骸も溝へ投棄されたものと考えられよう。このように、今回の調査では、祭祀場で行われていた祭祀の新たな要素が明らかになるという、大きな成果を上げることができた。

（實盛）

## 第2節 王権を支えた馬

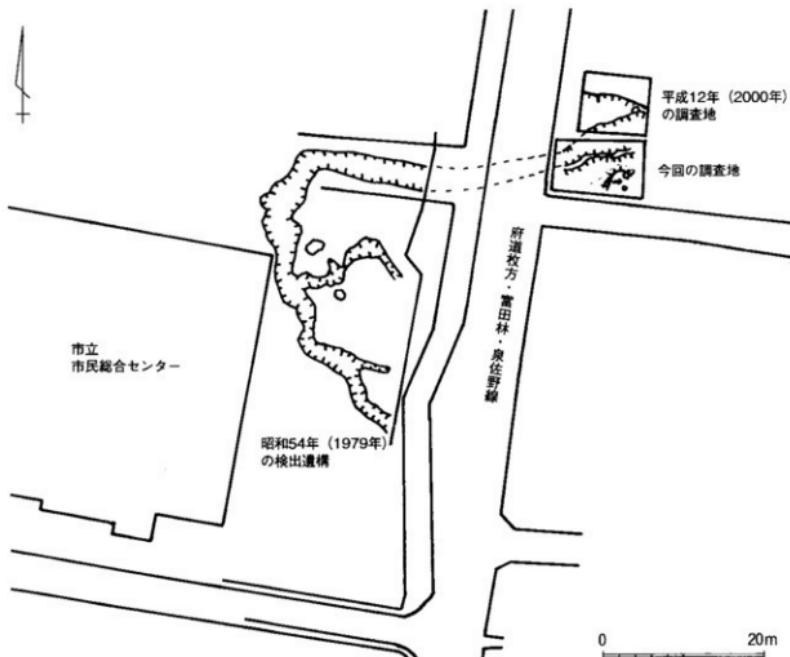
### はじめに

四條畷市奈良井遺跡の発見は、昭和51（1976）年から53（1978）年にかけて当時の国鉄片町線複線化工事に伴う発掘調査で古墳時代の集落跡を発見したことに始まる。

その後、東高野街道沿いに所在する四條畷市立市民総合センター建設予定地を昭和54（1979）年9月から発掘調査を実施した。その結果、古墳時代中期につくられた長さ約16m・最大肩幅約2.5m・深さ約1mの中央溝状遺構を検出した。その溝を取り囲むように一辺の長さ約40m・最大肩幅約5m・深さ1~1.5mの方形周溝状遺構が検出された。これは古墳時代後期初頭に属するものである。この方形周溝状遺構の西約60mのところで一辺約1.2m・深さ約1mの方形板枠井戸等の遺構を発見した。

これらの2時期にわたる遺構の中で特に注目されるのは「いけにえにした馬」である。7頭分の馬骨及び馬歯はすべて方形周溝状遺構内から出土した。その中でも体長1.5m・体高1.2mの蒙古系の小型成馬がほぼ完全な形で発見されたことは注目に値する。また、同一溝内の土壤に小型成馬の頭部だけを切取って埋葬された例もあった。

このような頭部だけの出土例としては、昭和52（1977）年の大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴う中野遺跡の発掘調査で古墳時代中期（5世紀中ごろ）の馬の下顎骨と併に朝鮮半島から持ち込まれてきた韓式土器が出土した。「古事記」・「日本書紀」に記述されているように渡来人の河内馬飼首荒籠と四條畷あたりの牧場が深く関わりがある。



第16図 奈良井遺跡古墳時代祭祀遺構配置図

今回の大坂瓦斯調査区で発見された溝は左記の方形周溝状遺構の続きであり、遺構全体を推察するための重要な調査成果が得られた。

今回の成果を踏まえ、四條畷一帯の古墳時代の馬がどのように四條畷に持ち込まれ、飼育され国家的存在としての馬を総合的に考えてみたいと思う。

#### 河内国讚良郡の自然環境

四條畷市は大阪府の東北部にあたり、国定公園生駒山地北部の山麓にひろがる綠豊かな地域である。明治時代の初めまで河内国讚良郡の名が使われた。讚良郡の範囲は四條畷市全域を中心にして、北側に寝屋川市の一部と南に大東市の一部を含めた地域である。

古墳時代に朝鮮半島から最新の技術が河内国に伝わった。鉄工技術は柏原市、須恵器の焼成技術は堺市・吹田市、馬と馬の飼育技術は四條畷市を中心とした讚良郡に伝わった。牧が所在したのは四條畷市のほぼ全域と寝屋川市の南部の一部である。その距離は東西約2km、南北約3kmである。

四條畷市域にある山系の谷間からは讚良川・岡部川・清瀧川・椎現川などの川が西へ流れているが、古墳時代には「河内湖」に注いでいた。一方、寝屋川市では淀川が「河内湖」に注いでいた。この大河の流れが河内湾に土を運び湾の入口をふさぎ淡水の河内湖となる原因の一つとなった。今の大坂平野中部は海だったり湖だったりした。

馬の放牧地の広さは、馬一匹につき1～2町歩（1町=約100m四方）必要である。土地は幾分傾斜をもち、乾燥性の肥沃土地。牧草が茂り、雜木林、相当量の清水、斜陽率50%などの条件が必要である。讚良はこれらの条件にほぼ適合する。

#### 牧は國家的事業だったか？

古墳時代中期初頭の河内国の讚良へ朝鮮半島から馬の飼育技術が伝わった。朝鮮半島からは瀬戸内航路で難波津へ、それにつながるのが河内湖である。四條畷には、南北に横たわる生駒山系を東西にまたぐ清瀧街道が走る。この道は河内湖から大和へつながる重要な道である。そして山系の西側山裾を南北に走る東高野街道と交差する。古墳時代には街道の名は登場しないが、遺跡の分布からみても古墳時代にはすでに存在していたと思う。このような立地条件からも大和王権が讚良郡に牧を誘致し、馬の機動力を軍事制度に組み入れ新戦力としたことは容易に理解できる。

#### 船から馬を降ろした藤屋北遺跡

四條畷市藤屋北遺跡は大阪府寝屋川北部流域下水道「なわて水みらいセンター」建設に伴い約25,000m<sup>2</sup>を調査した。その成果は古墳時代の馬牧場の存在をさらに明確なものとした（大阪府教育委員会調査）。

藤屋北遺跡は河内湖の東端にあたる湖畔近くの集落であったが、現在でもかなりの低湿地帯である。朝鮮半島から馬をつれて来た渡来人はここを終着点とした。そして牧を樂き、讚良の馬飼集団をつくりあげた。

#### 馬は準構造船に乗って

準構造船の船底などを切断して井戸枠にリサイクルした井戸が藤屋北遺跡で6基、寝屋川市長保寺遺跡で3基出土している。そのなかには西都原式準構造船と想定される船材もあった。外洋航海も可能なこれらの船に馬を乗せて朝鮮半島と河内湖を行き来していたのだろうか。

四條畷市では馬骨・馬歯の出土は普遍的であるが、藤屋北遺跡では集落から遺存状態の良い馬1体分が横たわるようにして出土した。体高124cmの蒙古系である。この馬は死に際し廃棄されたものではなく丁重に葬られたものである。現在、現地管理事務所建物壁面にレプリカと案内説明板を設置して公開している。

その他の集落からの主な馬骨としては、中野遺跡より井戸内の中央位堆積土層から板材の上に乗せた馬頭骨が出土。頭骨の上には石と土器が置かれていた。これは井戸の廃棄に伴う祭祀である。また、大阪瓦斯天然ガス埋設に伴う中野遺跡の集落内で火を使う祭祀に使われたものであろうか、焼け木とともに下顎骨が出土している。この馬骨が四條畷で最初の発見となった記念的な馬骨である。今から35年ほど前の調査であったが、馬飼集団の話などさほど注目されることはない。また、各遺跡からは渡来人がこの地に根をおろした証拠となる陶質土器や韓式系土器が出土している。

### 馬形埴輪とうりふたつの馬具

郡屋北遺跡では馬具の出土もみた。馬の口にかませる鉄製鐵轡、乗馬の際に脚をかけるカシ製1木造りの鐙2点、そして黒漆塗り木製鞍が出土した。これらの馬具は古墳出土のきらびやかなものではないが、牧で使った実用性の高いものだ。

精巧なつくりと美しい光沢を放つ漆塗り鞍は馬銅集団の首長クラスのものだろうか、後輪のみの出土であるが、木製鞍としては最古級である。

南山下遺跡出土の馬形埴輪は、ずんぐりとして足が短い。この馬がついている馬具は先述の出土品とうりふたつ。

蒙古系の馬の体形や表情、馬具などの装具もよく観察されていて忠実につくられた埴輪だ。馬具の出土によって埴輪の資料的価値も高くなかった。あと雲珠が出土すれば埴輪がついているすべての馬具が揃う。



第17図 馬形埴輪  
南山下遺跡 古墳時代中期 高さ54cm

### 豊富に得られた馬の飼料

馬に与える飼料は、水辺に生える草、そして難波海から得られる塩である。塩を焼く製塩土器は、表面にタクキ目が施された高さ7cmほどの小さな筒形の土器で、その器厚はごく薄く2mm程度である。郡屋北遺跡では土壌(約6.1m×2m、深さ0.7m)から約67kg出土した。個数に直すと1,500個分になり、日本一の出土量である。奈良井遺跡では、2m×1mの石組み製塩炉も確認されている。石はこぶし大の花崗岩である。

各遺跡では鉄製品だけではなく鉄滓や羽口の出土もある。儀式に必要な玉づくりもしていた。水田では稻作をし、牛を使っていた。讃良の馬銅集団は牧で使うすべてのものをまかなっていたのだ。

### 讃良の馬銅集団の祀り

奈良井遺跡や鎌田遺跡の祭祀場では馬を生け贋にして祀りをしていた。大切な馬を犠牲にするのは忍びないことだと思うが、牧の繁栄を願う強さのあらわれなのだろう。祀りではスリザサラを奏で、玉や木製の矢や刀が拂げられた。儀式のハイライトは、馬の首を切り落とす瞬間だったんだろう。奈良井遺跡では、一辺40mの方形台状をとり巻く溝から7頭分の馬が出土した。生け贋にされた馬の首は、今切り落としたかと思うほど生きしい。板に載せられた馬1体も出土したが遺存状態は悪かった。他に、36個の滑石製白玉入りの須恵器大甕、ミニチュアの人形12点、馬形5点、馬の飼育道具のブラシとムチが出土した。鎌田遺跡では、金製垂飾の1部も出土している。どちらの遺跡からも陶質土器や韓式系土器が出土している。



第18図 いけにえにされた馬の頭骨  
奈良井遺跡 古墳時代中期 推定年齢14歳

### 山裾に古墳群

馬銅集団は山裾を墓地に定め古墳群を構築した。この場所に立ち西を望むと讃良の牧や河内湖はも

とより難波津まで一望できた。今の大阪市域や大阪湾である。死者は朝鮮半島と河内を行き来する船や牧を見守ったのだろう。

古墳のほとんどは方墳や円墳で規模も20m前後のものがほとんどで、古墳時代後期に属するものが多い。そのなかには馬を周溝内埋葬していたものも數基あるが、馬齒のみが残るだけで遺存状態は悪いのが残念である。後の時代に寺院建立や水田開発などで削平されており、ほとんどの古墳は周溝が残るだけである。

#### 馬銅の首長の墓か？

古墳群における前方後円墳は数基確認されている。その代表的なものとして、大上3号墳は後期に属する全長45mの帆立貝式前方後円墳である。主体部は確認することができなかったが、二段築成の葺き石は良い状態で発見され、石の積み方も基本どおりであった。濠が二重に取り巻く可能性も考えられており、かなりの人物の墓と考えている。『日本書紀』の継体紀の条に登場する河内馬銅首荒籠の墓だと考えると面白い。荒籠は馬を走らせ渡来人のネットワークで情報収集し、越前国三国のオホド王を継体天皇即位へと導いた馬銅集團のリーダーであった。

この古墳付近は谷地形となり旧河川が流れ、大和につながる古道清滝街道が走っている。川跡では韓式系土器を使った祭祀跡があちこちで確認されている。湖畔から山裾まで讃良の馬銅集團の生活範囲だったのだろう。

#### まとめ

長年にわたる発掘調査によって讃良の牧の姿がビジュアルになった。今から1500年前、河内湖のほとりに船が停泊した。渡来人は船からゆっくり馬をおろし、馴染みの人々と握手をかわし、夜には酒を酌み交わし談笑した。川筋では馬がゆっくりと草を食んでいる。馬銅が馬に塩を与えたり、井戸から水を汲んで馬に与えている。空には韓カマドの煙が立ちのぼっている。女性たちが食事の準備でもしているのだろう。祭祀場では、スリザサラが奏でられるなかで、馬の首が切り落とされ生け贋にされている。山裾では汗をかきながら石を運んでいる。古墳造りで忙しいのだろう。それを尻目に川辺では今日もまつりをしている。牧で育った良馬はブラシで毛並みをそろえ、たてがみを編み、化粧されて、大王のもとへ届けられる。馬銅は寂しさと晴れやかな気持ちが混在したであろう。

大和朝廷が原初的な國のまとまりをつくり上げるために、馬が重要な役割を果たしたのに間違いないと確信している。馬の重要性は益々高まり、その後の時代まで統き、昭和初期まで軍事・輸送・通信にと活躍した。しかし、讃良の牧は奈良時代には姿を消していった。

(野島 慎)

## 参考文献

- 阿部幸一1999「雁屋遺跡発掘調査概要」Ⅲ、大阪府教育委員会。
- 宇治田和生・桑原武志1974「忍岡古墳」四條畷市文化財シリーズ2、四條畷市教育委員会。
- 梅原末治1937「河内四條畷村忍岡古墳」日本古文化研究所報告第4、日本古文化研究所。
- 梅原末治1985「銅鐸の研究」木耳社。
- 大阪府教育委員会編1970「四条畷町、正法寺跡発掘調査概報」大阪府教育委員会。
- 片山長三1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」「枚方市史」第一巻、枚方市役所。
- 片山長三1967b「縄文時代遺跡」「枚方市史」第一巻、枚方市役所。
- 岸本道昭・岡戸哲紀編1994「陶邑・伏尾遺跡A地区」大阪府教育委員会・財团法人大阪府埋蔵文化財協会。
- 櫻井敬夫1972「考古学」「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野鳥島2006「こども歴史 わたしたちの四條畷」四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野鳥島2010「歴史とみどりのまち ふるさと四條畷」四條畷市教育委員会。
- 瀬川芳則・塙山則之1994「楠遺跡」「瀬川市史」第1巻、寝屋川市。
- 四條畷市教育委員会編1978「四條畷の古代史発掘」四條畷市教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編2002「みどりの風と古墳」第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 角田徳幸編2003「史跡出雲因幡跡」1、鳥取県教育委員会。
- 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店。
- 辻本 武1987「雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市雁屋北町所在－」大阪府教育委員会。
- 中尾智行・山根 航編2009「護良部里遺跡」Ⅲ、財团法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩2001「和泉陶邑窯出土人頭埴輪の型式編年」芙蓉書房出版。
- 野島 稔1978「南山下遺跡」「まんだ」第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔1979「岡山南遺跡出土の古代下駄」「まんだ」第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔1980a「清瀧古墳群発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1980b「四條畷市奈良井遺跡（2）」「まんだ」第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1982「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅱ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984「雁屋遺跡発掘調査概要」1、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987a「雁屋遺跡」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987b「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅳ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987d「四條畷市南山下遺跡」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993「四條畷市奈ヶ丘駿駒前遺跡」「まんだ」第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994「雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1995「南野遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1996a「四條畷市坪井遺跡」「まんだ」第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996b「鐵治工房のある風景」「まんだ」第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996c「四條畷市城遺跡」「まんだ」第59号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997「五枝の琴」「まんだ」第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔1999「四條畷市大上古墳群」「まんだ」第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔2005「正法寺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・櫻井敬夫2000「更良岡山遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1977「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2000「奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2002「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 藤原忠雄1977「四條畷市奈良井遺跡」「まんだ」第2号、まんだ編集部。
- 宮崎泰史・藤永正明2006「年代のものさし」大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期溝状遺構に伴う土器群」「大阪歴史博物館研究紀要」第6号、財团法人大阪市文化財協会。
- 村上 始1997「木間池北方遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2000「四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。

- 村上 始2006「一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 山口 博編1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。



1. 調査前現況



2. 調査状況



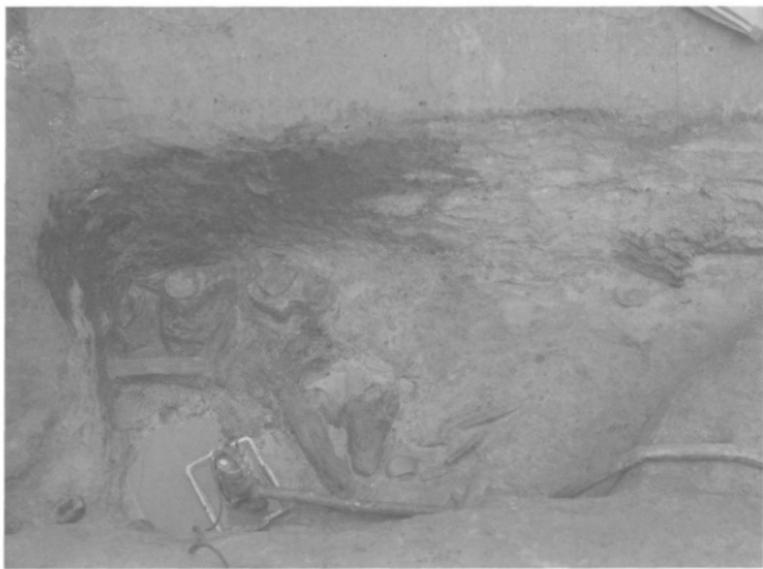
1. 溝 1-A・1-B 遺物出土状況（1～3 地区）西側から



1. 溝1-A 遺物出土状況（上層）北側から



2. 溝1-A 遺物出土状況（上層）東側から



2. 溝1-A 遺物出土状況（下層）南側から



2. 溝1-A 剣形木製品出土状況（下層）南側から



1. 溝1-A 木製鋤出土状況（上層）東側から



2. 溝1-A 滑石製勾玉出土状況（下層）南側から



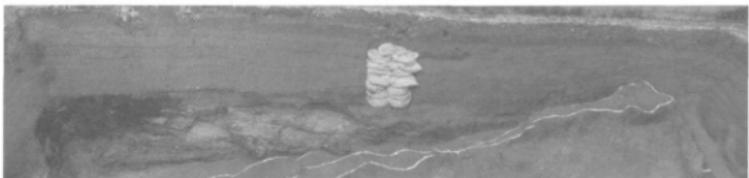
1. 溝1-A・1-B全景（1～3地区）北東側から



2. 1・3地区全景（溝1-B・土坑・柱穴）西側から



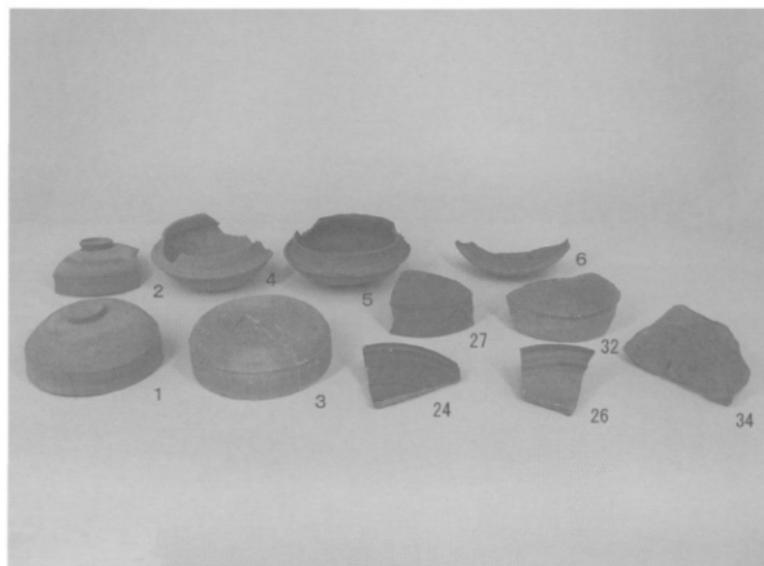
1. 溝1-A・1-B全景（2・4地区）東側から



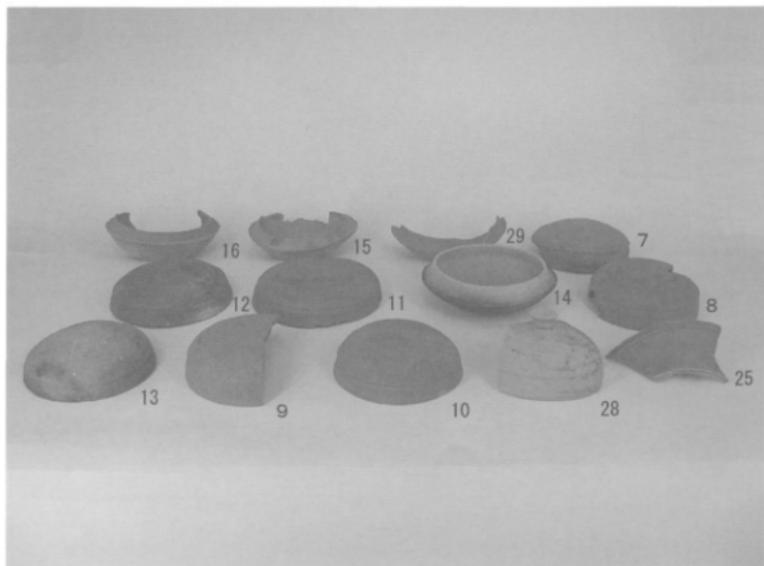
2. 北壁断面 南側から



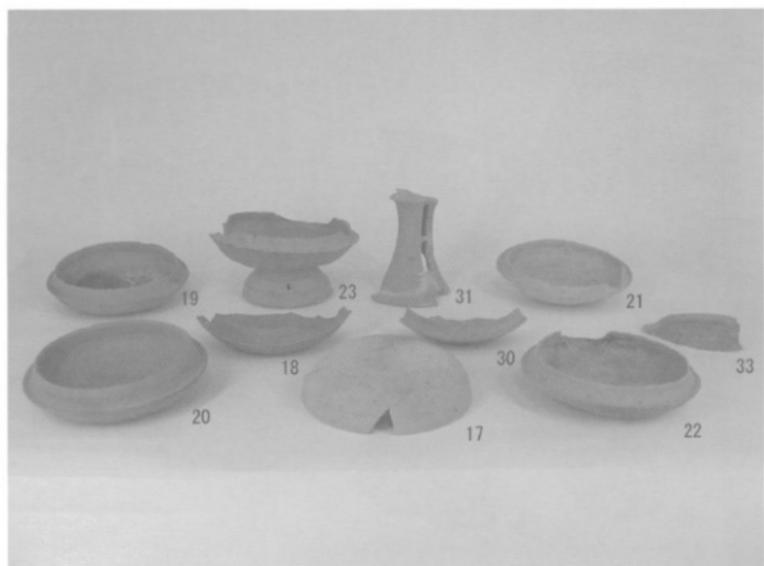
3. 溝1-A・1-B・溝2断面（E-E'）西側から



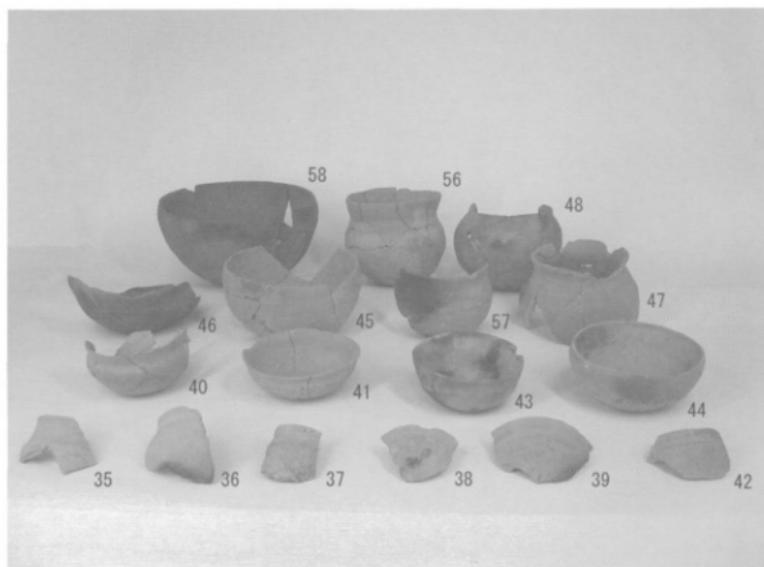
1. 出土遺物（須恵器）



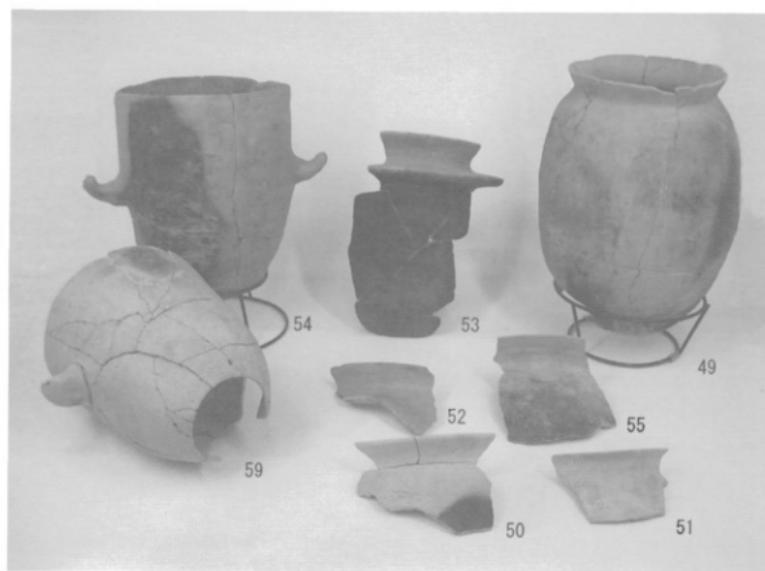
2. 出土遺物（須恵器）



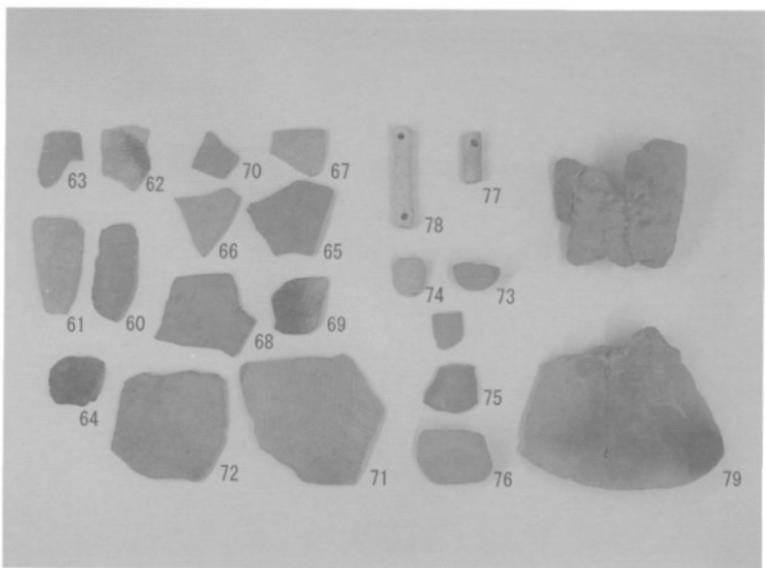
1. 出土遺物（須恵器）



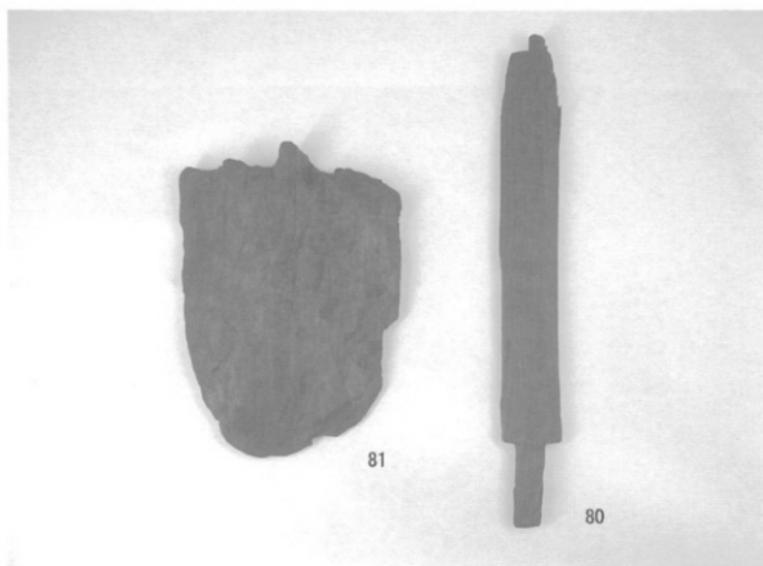
2. 出土遺物（土師器）



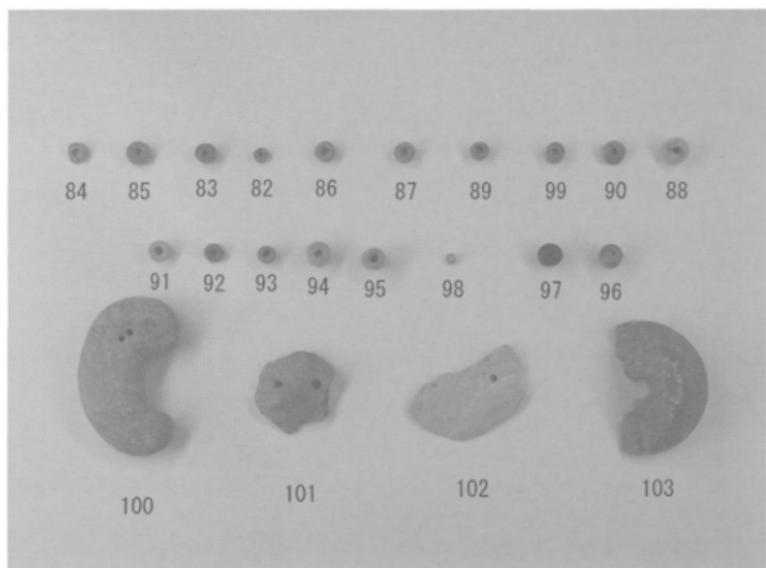
1. 出土遺物（土師器）



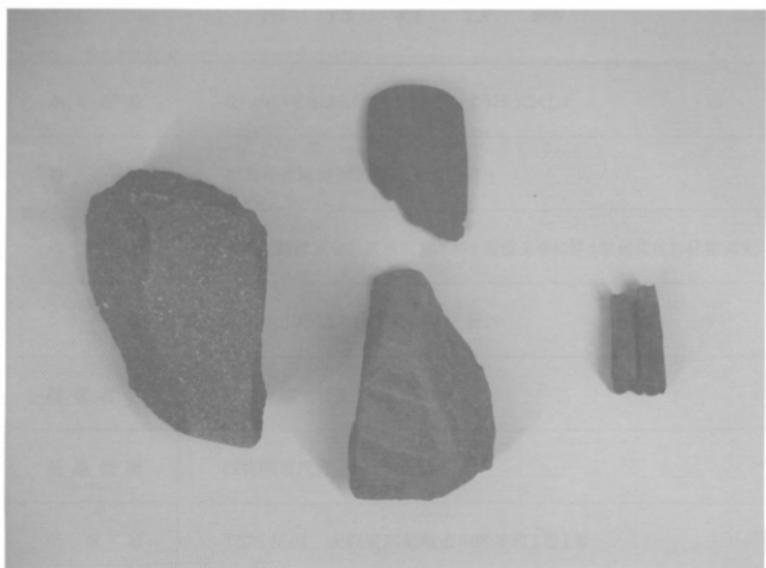
2. 出土遺物（韓式系土器・製塩土器・土製品）



1. 木製品（鉤・剣形）



2. ガラス玉・滑石製品・土玉



1. 砥石・石製品・馬齒

# 報告書抄録

ふりがな	ならいいせきはつくつちょうさかいようほうくしょ
書名	奈良井遺跡発掘調査概要報告書
副書名	大阪瓦斯株式会社高所対策ガバナ設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化財発掘調査報告
編著者名	野島 稔・村上 始・實盛良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2012(平成24)年2月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ならいいせき 奈良井遺跡 (10-1)	しじょうなわてし おおあざなかの 四條畷市 大字中野	272299	34° 44' 18"	135° 38' 52"	平成23年 3月3日 平成23年 4月4日	70.4 m <sup>2</sup>	ガス施設 設置工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良井遺跡 (10-1)	集落跡・ 祭祀跡	古墳	溝、土坑、 柱穴	土師器、須恵器、韓式系土器、円筒形土製品、滑石製玉類、ガラス小玉、剣形木製品、馬齒	馬関連の祭祀場をとりまく溝の続きを確認。 祭祀場上に柱穴を確認。

奈良井遺跡発掘調査  
概要報告書

平成24年2月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社